

鹿児島大学そだちサポートプロジェクト

鹿児島県における新型コロナウイルス感染症拡大が子育て及び子どもの生活に
与える影響に関する調査報告書

(第3期：2022年8月)

鹿児島大学そだちサポートプロジェクト

(本調査担当：高橋佳代・今村智佳子・平田祐太郎・川添茜)

はじめに

新型コロナウイルス（COVID-19）の影響は2020年に始まり、2023年まで長期的に続くことになった。本調査は、長期化した感染症対策下での生活が子どもと保護者のメンタルヘルスにどのような影響を与えているか把握するために行なっているものである。長期的な影響を捉えるため、2020年から毎年1回実施しているものである。

2020年8月の第1期調査、2021年8月の第2期調査に引き続き、2022年8月に第3期調査を行った。本報告書は第3期調査をまとめたものである。調査時期は、いわゆる第7波の時期であり、オミクロン株を中心とした感染が拡大し、全国的に新規感染者数、死者数ともに増加していた頃である。

調査結果は〔A.調査対象者の概要〕〔B.子どもの心身の変化〕〔C.保護者の心身の変化〕〔D.新しい生活様式の中で〕〔E.特別支援教育を受けている子どもたち・保護者について〕に分けて報告し、最後に総合的なまとめと展望を記載した。これまでの調査結果と合わせてご参照いただき、調査結果が子育て支援の一助になることを願っている。

1. 調査目的

新型コロナウイルス感染症の拡大とそれに伴う生活の変化が、幼児・小学生の保護者子に与えた影響を明らかにすること。

2. 調査の方法

1) 調査期間、調査対象、回収数

調査期間：2022（令和4）年8月3日～9月10日

調査対象：鹿児島県に居住し4歳から12歳（小6まで）を育てる保護者。

調査方法：Google formsを利用したWeb調査。チラシ等による調査の協力と依頼を行った。回答にかかる時間は10～15分であった。

回収数：84回答

2) 調査項目

調査票は、A.基本項目、B.子どもの心身の変化、C.保護者の心身の変化、D.新しい生活様式に向けて、に分けて質問項目を設定した。

3) 倫理的配慮

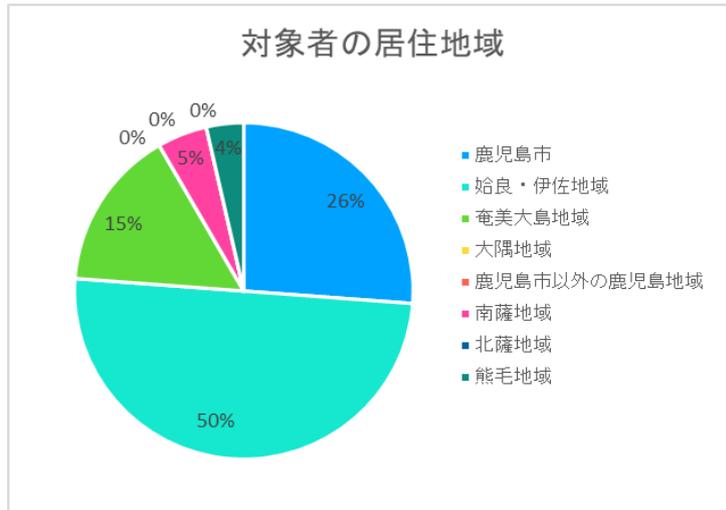
フォーム冒頭で調査目的と個人情報の取り扱いを説明し、同意が得られた方だけを対象に調査を行った。調査は無記名で個人を特定できる情報は収集せず、回答は統計的に処理を行った。

3. 調査結果

A. 調査対象者について

A-1. 対象者居住地域

調査対象者の居住地域は、始良・伊佐地域が50%と最も多く、次いで鹿児島市26%、奄美大島15%であった。その他、南薩地域、熊毛地域からの回答が得られた。



※各地域詳細

始良・伊佐地域：霧島市、伊佐市、始良市、湧水町

奄美大島地域：奄美市、大和村、宇検村、瀬戸内町、龍郷町、喜界町、徳之島町、天城町、伊仙町、和泊町、知名町、与論町

大隈地域：鹿屋市、垂水市、曾於市、志布志市、大崎町、東串良町、錦江町、南大隈町、肝付町

鹿児島市以外の鹿児島地域：日置市・いちき串木野市・三島村・十島村

南薩地域：枕崎市、指宿市、南さつま市、南九州市

北薩地域：阿久根市、出水市、薩摩川内市、さつま町、長島町

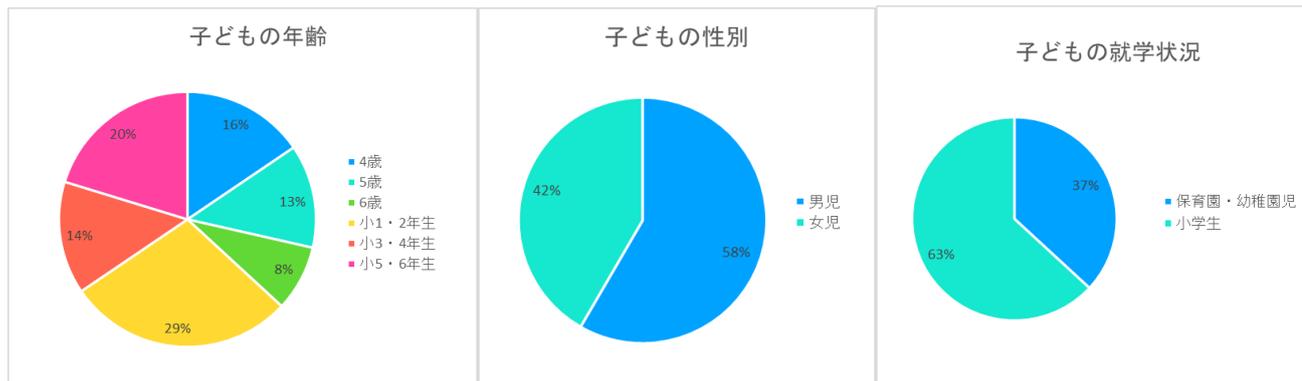
熊毛地域：西之表市、中種子町、南種子町、屋久島町

A-2. 回答者

回答者は90%が母親で、8%が父親、1%が祖父母であった。今回の調査では母親からの回答が多かった。

A-3. 子どもの年齢・学年／就学状況／性別

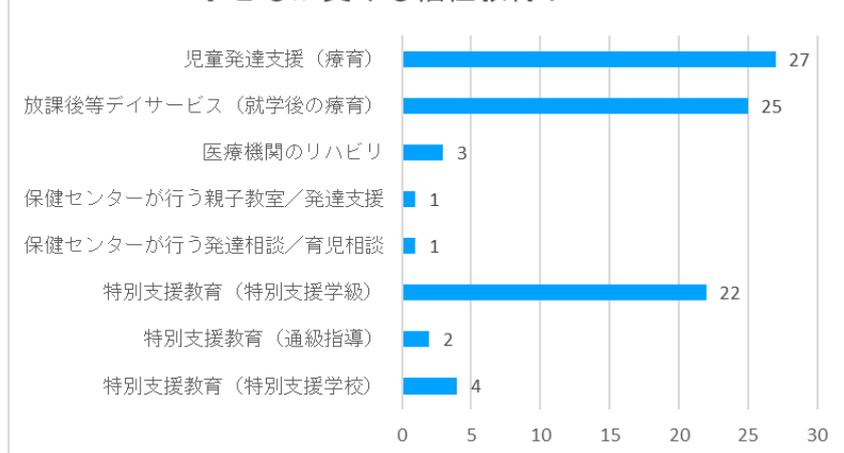
対象となる子どもの年齢は未就学が37%（31名）、小学生が63%（53名）であった。それぞれの年齢や性別は以下に示す。



A-4. 子どもが受ける特別支援教育、福祉教育サービス（複数回答可）

特別支援教育や福祉教育サービスを受けている子どもは回答者全体の63%であった。教育や福祉教育サービスの内訳では、児童発達支援（療育）、放課後デイサービス（就学後の療育）、特別支援教育（特別支援学級）の順で利用している子どもが多かった。

子どもが受ける福祉教育サービス



A-5. 調査への参加歴

今回はじめて本調査に参加した人が61%（51名）、2020年または2021年に参加した人が15%（13名）、2020年と2021年にも参加した人が7%（6名）、不明17%（14名）であった。

A-6. 子どもの診断の有無

回答した対象の子どものうち、診断のない子どもは64%（54名）、何らかの診断名や障害の疑い、傾向がある子どもは36%（30名）であった。

B. 子どもの心身の変化

※下記の結果文章では「とてもそう思う」「少しそう思う」を合わせて「そう思う」という回答として整理し記述した。

感染症対策下の子どもの生活感覚について

子どもは感染症対策下の生活に「慣れたか」「疲れているか」「我慢をしているか」「イライラしているか」「良いところがあると思っているか」「楽しんでいるか」について尋ねた。その結果、保護者の81%は感染症対策下の生活に子どもは慣れていると捉えているものの、74%が感染症対策下の生活に我慢を強いられていると捉え、47%は感染症対策下の生活に疲れを感じていると捉えていることが示された。また、41%が感染症対策下の生活に子どもがイライラしていると捉えていた。

他方、34%の保護者は子どもが「感染症対策下の生活にも良いところがあると思っている」と捉えており、25%は「感染症対策下の生活を楽しんでいる」と捉えていることも示された。

感染症対策下の生活における子どもの心身の変化

体調不良の訴え、睡眠、食欲、通学、怒り、甘え、疲労、勉強、家族トラブル、友人トラブル等について尋ねた。その結果、変化が多い順では「甘えることが増えた（37%）」「疲れやすくなった（30%）」「怒りっぽくなった（25%）」と心理面の変化が多く感じられていた。また「通学の問題が増えた（22%）」「身体的不調の訴えが増えた（18%）」「勉強に問題が生じた（17%）」など行動面や身体面の変化も感じられていた。「家族とのトラブルが増えた（21%）」など対人面の問題も増加している。

子どもの変化に関する自由記述からは、行事や活動の中止、感染症対策下の生活における行動制限に対するストレスを感じている一方で、諦めを感じていたり、行動制限への慣れを感じている子どももいることがうかがえた。また、マスクの着用など感染症対策に慣れてきている一方で、マスクが外せなくなったという変化も挙げられていた。

第1期調査(2020年)・第2期調査(2021年)との比較

‘イライラや疲れは継続’ ‘対策生活に慣れ’

2020年度および2021年度の同項目の全年齢およびそれぞれの年齢群の回答の割合を表に示す。子どもの生活感覚の変化について、2021年度と2022年度の2年間で比較すると、疲れや我慢など多くの項目では変化が見られない一方で、感染症対策下の生活に慣れていると感じる人が58%から81%と増加していることがわかった。長引く感染症対策下の生活で変わらず疲れや我慢、イライラを感じているものの、多くの子どもは慣れを感じているようである。

子どもの心身の変化について、2020年度と2021年度、2022年度の3年間で比較すると、睡眠の問題の増加を感じる人は2020年度で24%であったが、2021年度は22%、2022年度は14%と年々少なくなっている。一方、疲れやすさを感じる人は2020年度で22%であったが、2021年度は28%、2022年度は30%と年々増加している。感染症対策下の生活において、睡眠の問題は改善しつつあるが、外出制限などの影響からか、疲れやすさを感じる人が増えているようである。

子どもの生活感覚の変化 2年間比較

参考)第1期・第2期・第3期において項目に当てはまる(とてもそう感じる・少しそう感じる)と回答した割合

| | 第2期:2021年8月 | | 第3期:2022年8月 | |
|-------------|-------------|-----|-------------|-----|
| | 全年齢 | | 全年齢 | |
| | 未就学児 | 小学生 | 未就学児 | 小学生 |
| 慣れている | 50 | 58 | 83 | 80 |
| 疲れている | 46 | 48 | 45 | 47 |
| 我慢をしている | 63 | 73 | 77 | 72 |
| イライラしている | 29 | 39 | 39 | 41 |
| 良いところがあると思う | 42 | 34 | 39 | 30 |
| 楽しんでいる | 29 | 25 | 26 | 24 |

※表中の数値はそれぞれの調査時期の回答者における割合(%)を示す。

子どもの心身の変化 3年間比較

参考)第1期・第2期・第3期において項目に当てはまる(とてもそう思う・少しそう思う)と回答した割合

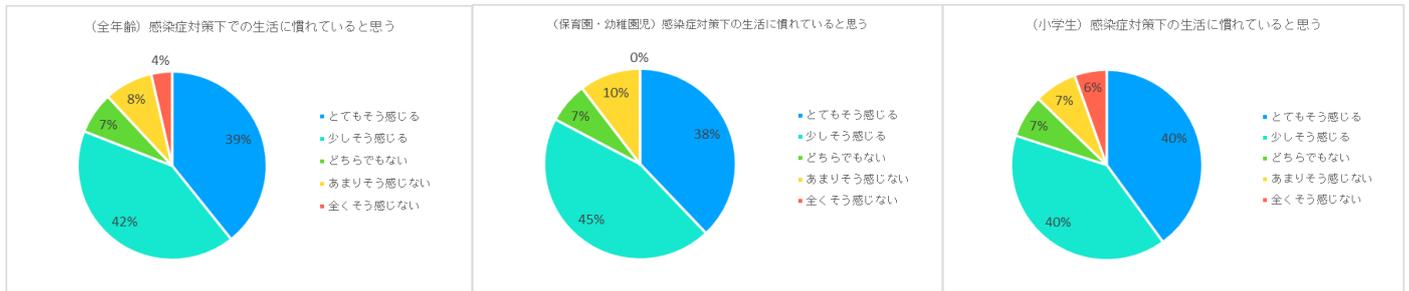
| | 第1期:2020年8月 | | 第2期:2021年8月 | | 第3期:2022年8月 | |
|-------------|-------------|-----|-------------|-----|-------------|-----|
| | 全年齢 | | 全年齢 | | 全年齢 | |
| | 未就学児 | 小学生 | 未就学児 | 小学生 | 未就学児 | 小学生 |
| 身体的不調の訴えの増加 | 5 | 11 | 17 | 19 | 16 | 18 |
| 睡眠の問題の増加 | 14 | 24 | 30 | 20 | 16 | 14 |
| 食欲の変化 | 4 | 10 | 17 | 20 | 13 | 13 |
| 通学の問題の増加 | 5 | 8 | 21 | 23 | 23 | 22 |
| 怒りっぽくなった | 19 | 25 | 30 | 36 | 19 | 25 |
| 甘えの増加 | 38 | 40 | 42 | 38 | 37 | 37 |
| 疲れやすくなった | 10 | 22 | 25 | 28 | 22 | 30 |
| 学習上の問題の増加 | 2 | 22 | 17 | 18 | 9 | 17 |
| 家族トラブルの増加 | 5 | 12 | 21 | 23 | 19 | 21 |
| 友達トラブルの増加 | 5 | 10 | 8 | 13 | 13 | 12 |

※表中の数値はそれぞれの調査時期の回答者における割合(%)を示す。

B-1. 感染症対策下での子どもの生活感覚

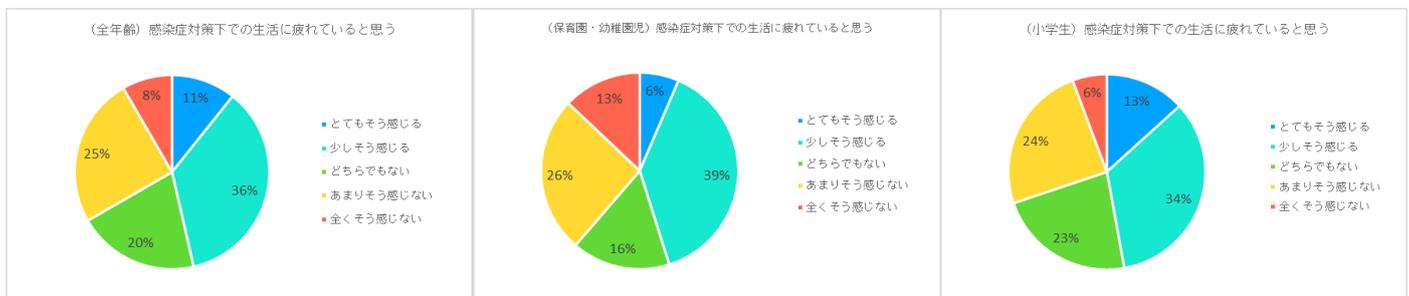
(感染症対策下の生活に慣れていると思うか?)

全年齢では 81%、未就学児 83%、小学生 80%と、8 割以上の子どもが感染症対策下の生活に慣れていると捉えられている。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



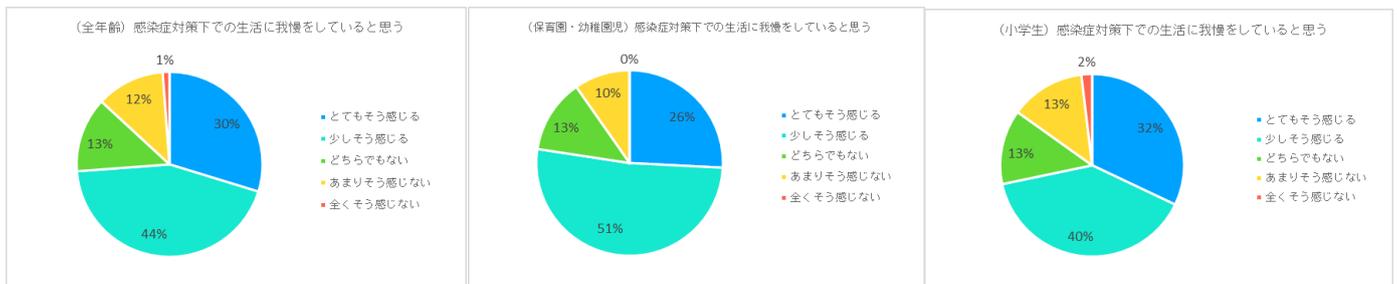
(感染症対策下での生活に疲れていると思うか?)

全年齢では 47%、未就学児では 45%、小学生では 47%と約半数の子どもが感染症対策下の生活に疲れを感じていると捉えられている。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



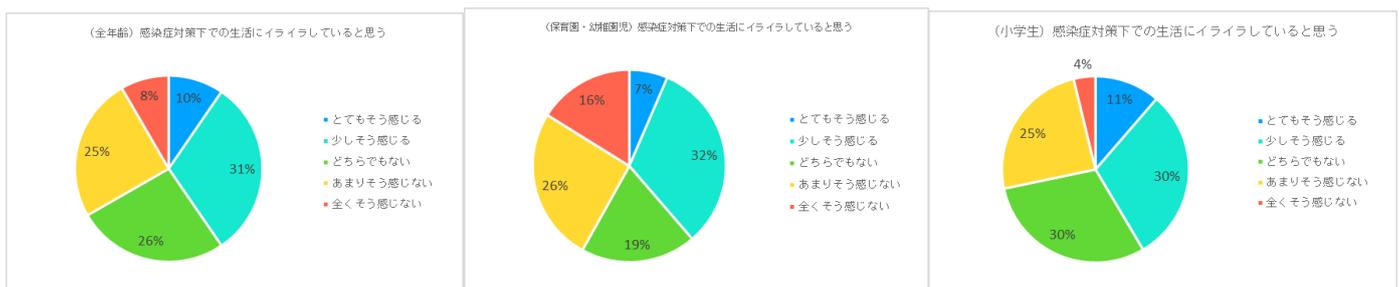
(感染症対策下の生活に我慢をしていると思うか?)

全年齢では 74%、未就学児では 77%、小学生では 72%と 7 割以上の子どもが感染症対策下の生活に我慢をしていると捉えられている。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



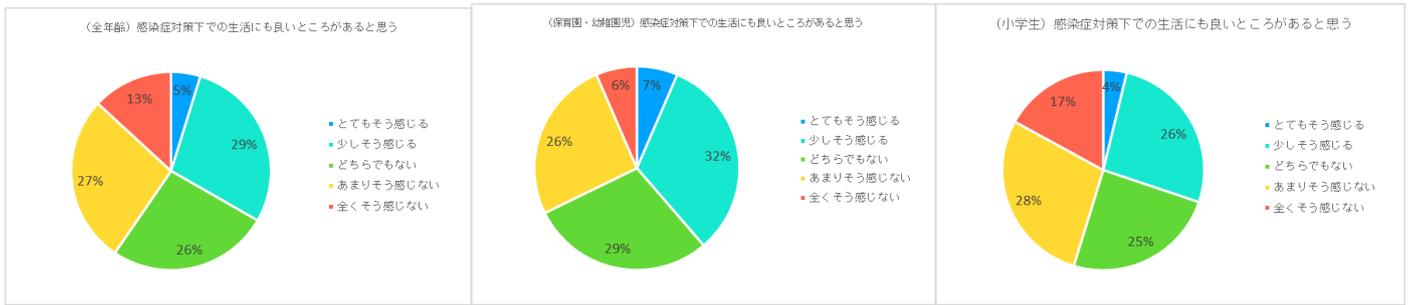
(感染症対策下の生活にイライラしていると思うか?)

全年齢では 41%、未就学児では 39%、小学生では 41%と 4 割程度の子どもが感染症対策下の生活にイライラしていると捉えられている。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



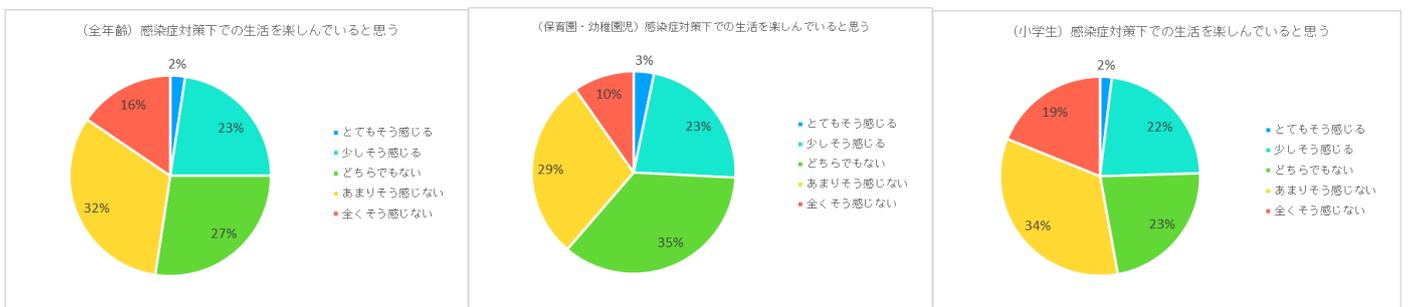
(感染症対策下の生活にも良いところがあると思うか?)

全年齢では 34%、未就学児では 39%、小学生では 30%と、3 割程度の子どもが感染症対策下の生活にも良いところがあると感じていると捉えられている。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



(感染症対策下の生活を楽しんでいると思うか?)

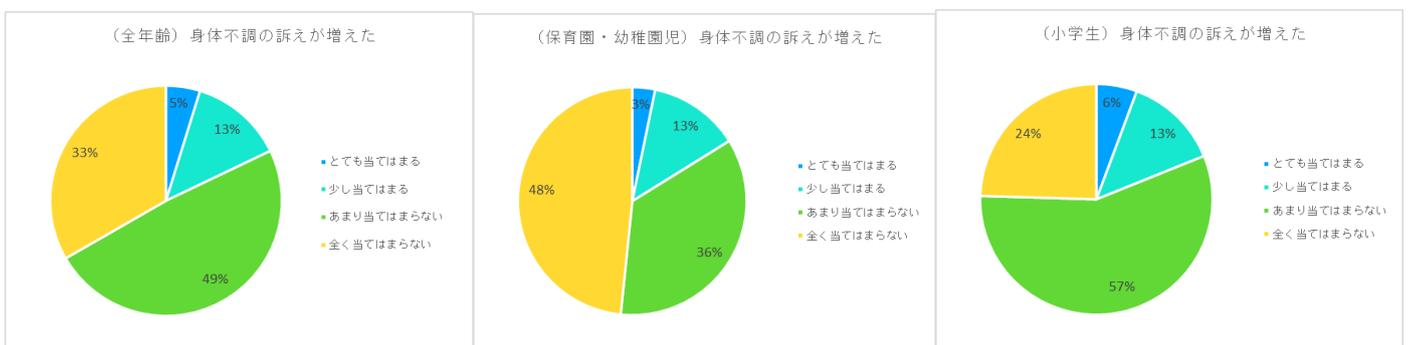
全年齢では 25%、未就学児では 26%、小学生では 24%と 3 割弱の子どもが感染症対策下の生活を楽しんでいると捉えられている。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



B-2. 子どもの心身の変化

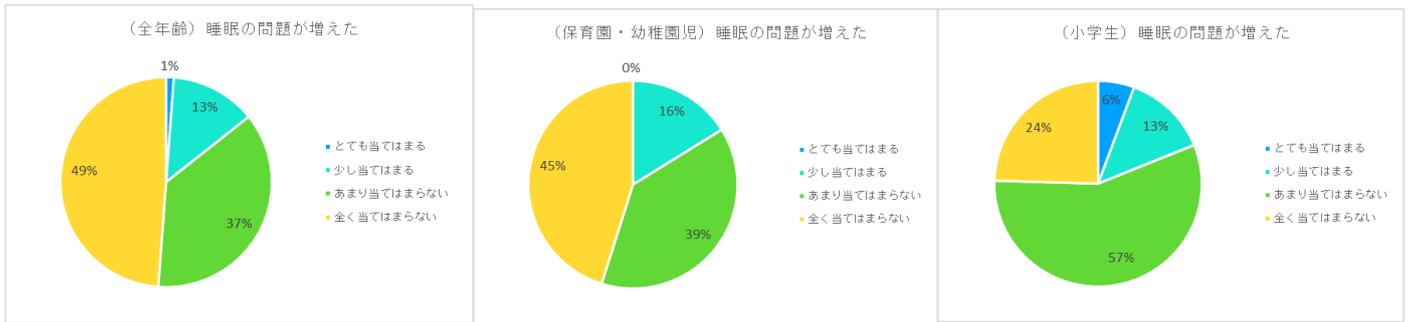
(身体不調の訴えが増えたか)

全年齢では 18%、未就学児では 16%、小学生では 19%が身体不調の訴えが増えたと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



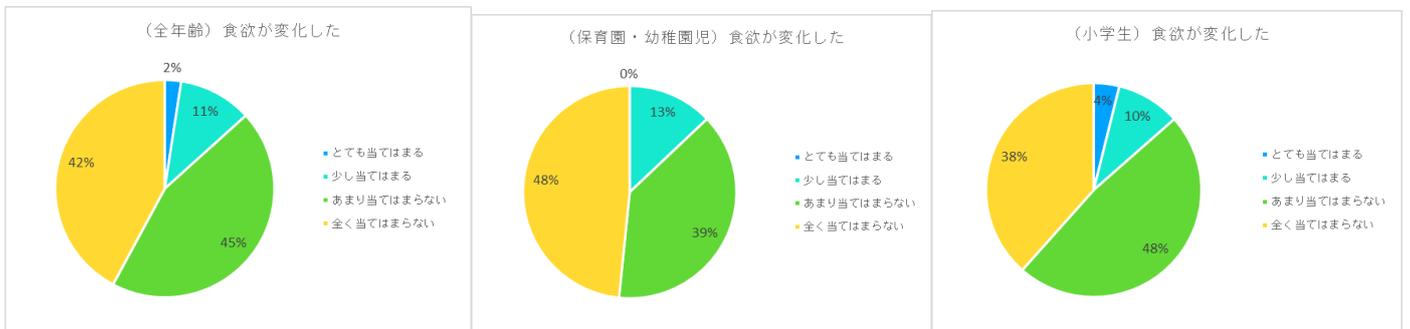
(睡眠の問題が増えたか)

全年齢では 14%、未就学児では 16%、小学生では 19%が睡眠の問題が増えたと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



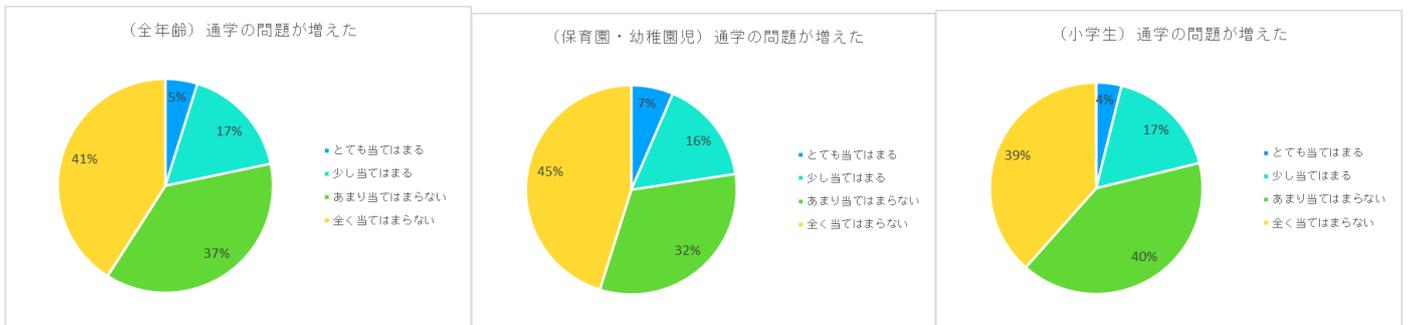
(食欲が変化したか)

全年齢では 13%、未就学児では 13%、小学生では 14%が食欲の変化があったと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



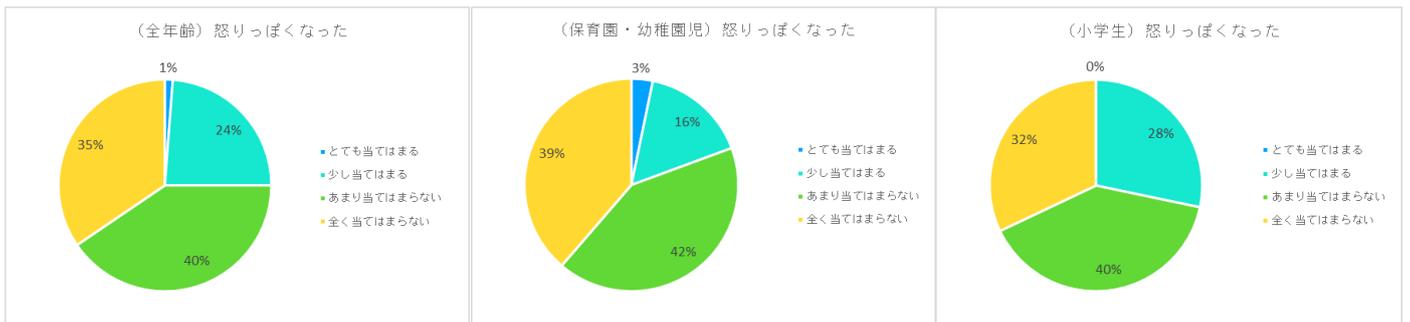
(通学の問題が増えたか)

全年齢では 22%、未就学児では 23%、小学生では 21%が通学の問題が増えたと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



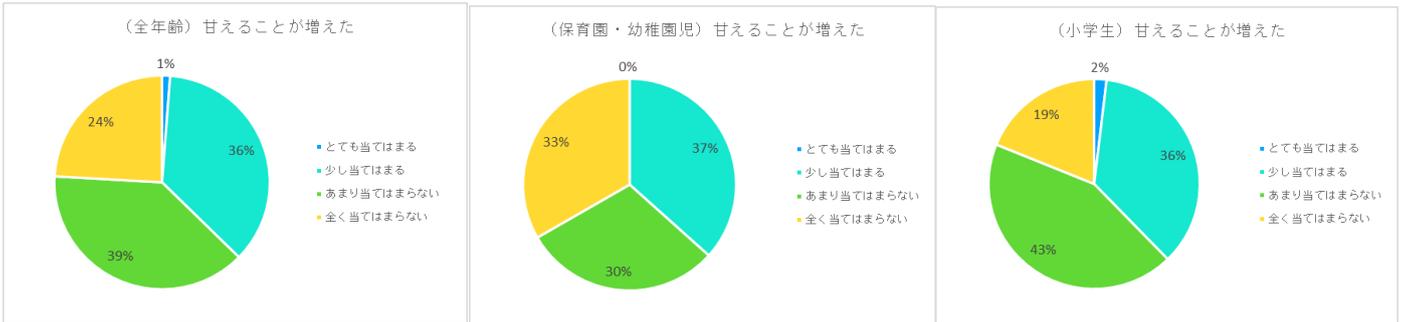
(怒りっぽくなったか)

全年齢では 25%、未就学児では 19%、小学生では 28%が怒りっぽくなったと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



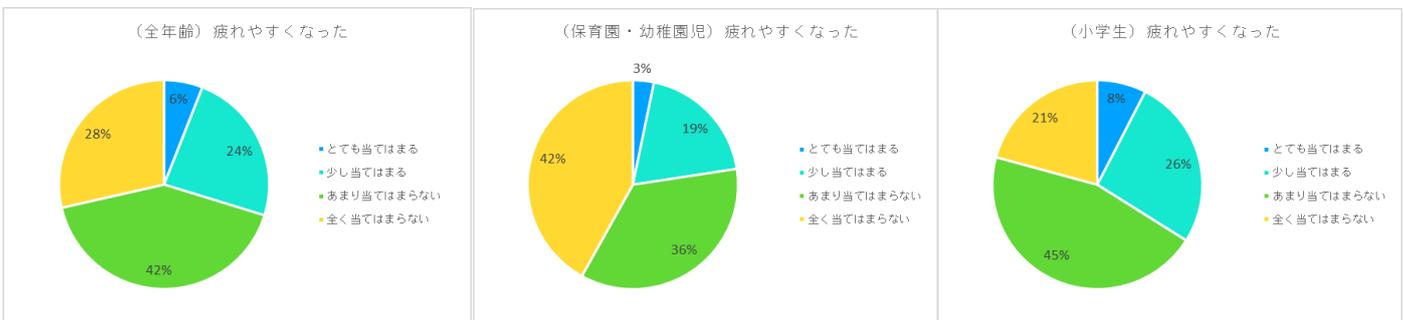
(甘えることが増えたか)

全年齢では 37%、未就学児では 37%、小学生では 38%が甘えることが増えたと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



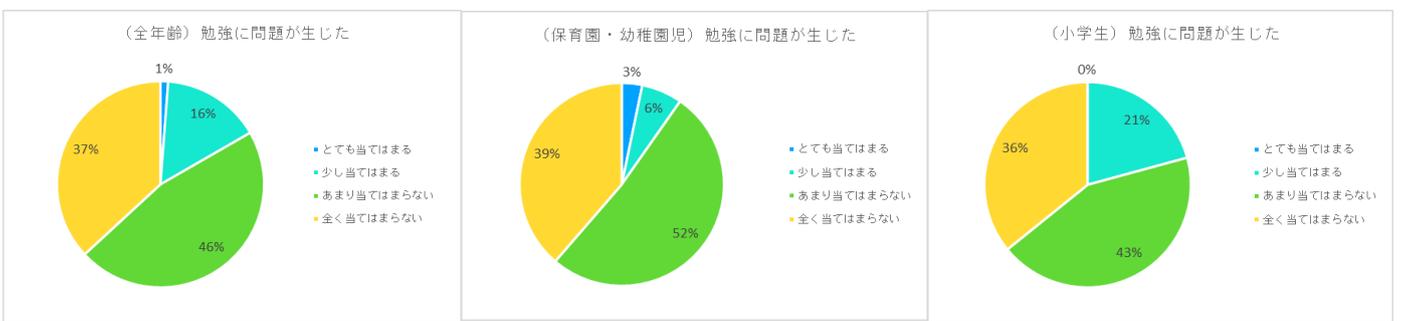
(疲れやすくなったか)

全年齢では 30%、未就学児では 22%、小学生では 34%が疲れやすくなったと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



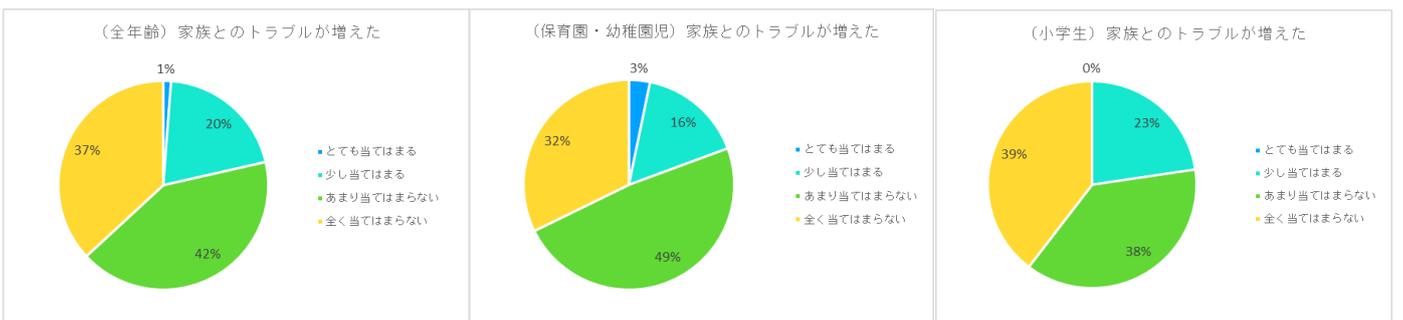
(勉強に問題が生じた)

全年齢では 17%、未就学児では 9%、小学生では 21%が学習上の問題が増えたと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



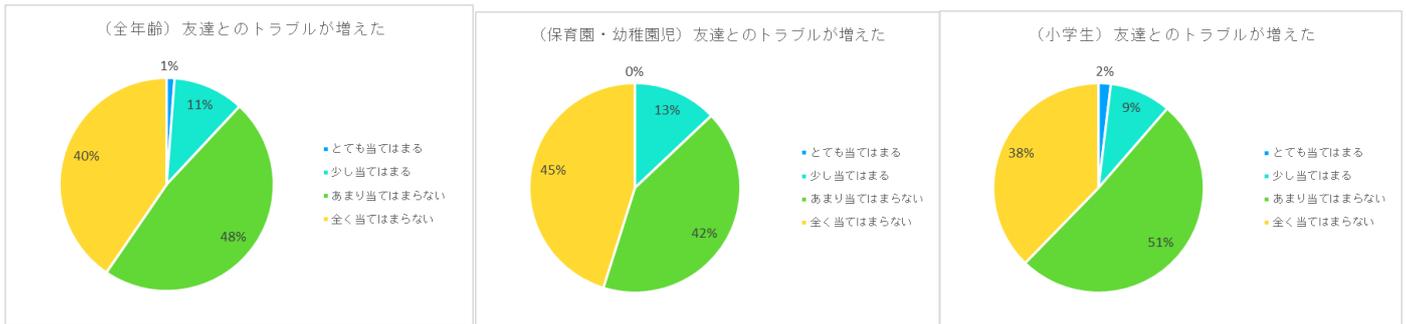
(家族とのトラブルが増えたか)

全年齢では 21%、未就学児では 19%、小学生では 23%が家族とのトラブルが増えたと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



(友達とのトラブルが増えたか)

全年齢では 12%、未就学児では 13%、小学生では 11%が友達とのトラブルが増えたと回答。未就学児と小学生との間に統計的な差はなかった。



B-3. 子どもの変化として気づくこと (自由記述)

(行事や活動の中止、行動制限に伴う変化)

- ・祖父母に会いに行けず、寂しがる様子あり
- ・お友達と遊べなかったり、行事がなかったりで「暇。」とよく言われる
- ・行事や活動がほとんど中止になり楽しみが減りモチベーションが上がらない
- ・地域活動がなく地域とのつながりがない
- ・計画的な(一日単位及び週単位)行動に制限がかかることが多くなった
- ・療育に行けない日が増えた影響だと思っているが、療育的個性が表面にみられることが増えた
- ・行事の短縮や中止で変化が減り、かんしゃくは減っている
- ・マスクを強制させられたり、甘えたくても人と距離を取らないといけなかったりで、本人の思うように行かないことが以前より増えていると感じる
- ・社会性をつける場が減り、伸びない

(感染症への不安、活動の諦め)

- ・コロナに、かからないように人が多いところには行かなくなった
- ・何か行動するとき、コロナを気にすることがある
- ・「コロナが多いからどこも行けないね」と言う

(活動の諦めへの慣れ)

- ・「コロナだから」と、やりたいことを諦めることへの抵抗が減ったかもしれない
- ・「コロナのせいで」と言わなくなった
- ・行きたい所(テーマパークなど)は、行きたい思いを我慢というよりは、もう諦めてしまったように感じる
- ・2歳くらいからコロナ生活なので、行きたいところがあっても行けないのは当たり前と思っているよう

(マスクへの慣れ、マスクを外せない)

- ・マスクを外せなくなった、マスクに慣れすぎて外す事の方が恥ずかしがる
- ・自分から進んでマスクをつけるようになった(2)
- ・マスクを意識するようになった
- ・マスクが当たり前になっている、マスク着用を嫌がらなくなった
- ・スポーツ時やキャンプなど、全力で走っている時もねるときもマスクをしていて、酸素が足りているか心配。

(心身の変化)

- ・口呼吸の頻度が高まったように感じる

- ・よだれがある子だが、マスクをするようになり、飲み込む意識が下がり、悪化してしまった
- ・食欲が増したりした
- ・頭痛
- ・学校が休校になったり、鼻水が出ただけで早退連絡がきたりと、学校生活のリズムが狂い、登校時の不安や脱力からの歩行困難などが続いた。
- ・情緒不安定になったように思う
- ・イライラしやすくなった (2)
- ・ストレス、対人関係、信頼関係。感情表現が乏しい
- ・汚れた遊び（泥遊びなど）に抵抗があり嫌がることがあった。消毒や手洗いを励行するにつれて汚れる事が悪く感じているのかと思う
(行動的变化)
- ・タブレットやテレビをよくみる
- ・保育園での友達とのコミュニケーションが減った

C. 保護者の心身の変化

※下記の結果文章では「とてもそう思う」「少しそう思う」を合わせて「そう思う」という回答として整理し記述した。

感染症対策下での保護者の生活感覚について

保護者は感染症対策下の生活に「慣れたか」「疲れているか」「我慢をしているか」「イライラしているか」「良いところがあると思っているか」「楽しんでるか」について尋ねた。その結果、83%は感染症対策下の生活に慣れていると感じるものの、79%は疲れを感じ、78%は我慢をしていると感じていることが示された。また、53%はイライラすると感じている。一方で、49%が感染症対策下の生活にも良いところがあると感じているものの、実際に感染症対策下の生活を楽しめていると感じる人は14%と少ないことが示された。保護者自身の生活感覚としても、子どもの生活感覚と同様に、慣れてきていると感じる人が多く見られるものの、疲れや我慢、イライラを感じる人は子どもの場合よりも割合が多いようである。

感染症対策下での生活における保護者の心身の変化

保護者自身の体調不良、睡眠、食欲、通勤、怒り、疲労、業務・家事の問題、家族トラブル、友人トラブル等について尋ねた。その結果、変化が多い順では「疲れやすくなった (59%)」「怒りっぽくなった (44%)」など心理面的変化が多く見られた。また、「業務・家事遂行上の問題の増加 (38%)」「体調不良の増加 (36%)」など、行動上・身体的な問題の変化も多く見られた。

自由記述からは、感染症対策や行動制限、自粛生活への疲れやストレス、心身への影響などの回答が見られていた。また、感染予防に関しても気を使うことが増えてストレスを感じたり、様々な感染症情報を見極めることの疲れも挙げられていた。日々変化していく情報をどのように捉え、行動していくかがわからず、不安やストレスを感じやすかったことが窺える。

第1期調査 (2020年)・第2期調査 (2021年) との比較

‘対策生活に慣れ’ ‘心身の負担は継続’ ‘家族トラブルは増加’

2020年度および2021年度の同項目の全年齢およびそれぞれの年齢群の回答の割合を表に示す。保護者の生活感覚の変化について、2021年度と2022年度の2年間で比較すると、疲れや我慢など多くの項目では変化が見られない一方で、感染症対策下の生活に慣れていると感じる人が64%から83%と増加していることがわかった。子どもの場合と同様に、多くの保護者は感染症対策下の生活に慣れを感じているようである。

保護者の心身の変化について、2020年度と2021年度、2022年度の3年間で比較すると、多くの項目で変化がなく、心身の負担は軽減していないことが示されている。変化が見られた項目としては、通勤に問題が生じたという人が2020年度で5%であったが、2021年度では11%、2022年度では19%と増加している。また、家族とのトラブルが増えたと感じる人は2020年では15%であったが、2021年度で24%、2022年度では28%とさらに増加している。感染症対策として人混みを避けたり、濃厚接触者として自宅待機をしなければならなかったりしたため、通勤の問題が増えた可能性が考えられる。

保護者の生活感覚の変化 2年間比較

参考)第1期・第2期・第3期において項目に当てはまる(とてもそう感じる・少しそう感じる)と回答した割合

| | 第2期:2021年8月 | | 第3期:2022年8月 | |
|-------------|-------------|-----|-------------|-----|
| | 全年齢 | | 全年齢 | |
| | 未就学児 | 小学生 | 未就学児 | 小学生 |
| 慣れている | 75 | 64 | 87 | 83 |
| 疲れている | 80 | 60 | 87 | 81 |
| 我慢をしている | 79 | 78 | 77 | 79 |
| イライラしている | 41 | 47 | 65 | 53 |
| 良いところがあると思う | 54 | 48 | 48 | 49 |
| 楽しんでいる | 26 | 18 | 16 | 14 |
| | | 15 | | 13 |

※表中の数値はそれぞれの調査時期の回答者における割合(%)を示す。

保護者の心身の変化 3年間比較

参考)第1期・第2期・第3期において項目に当てはまる(とてもそう思う・少しそう思う)と回答した割合

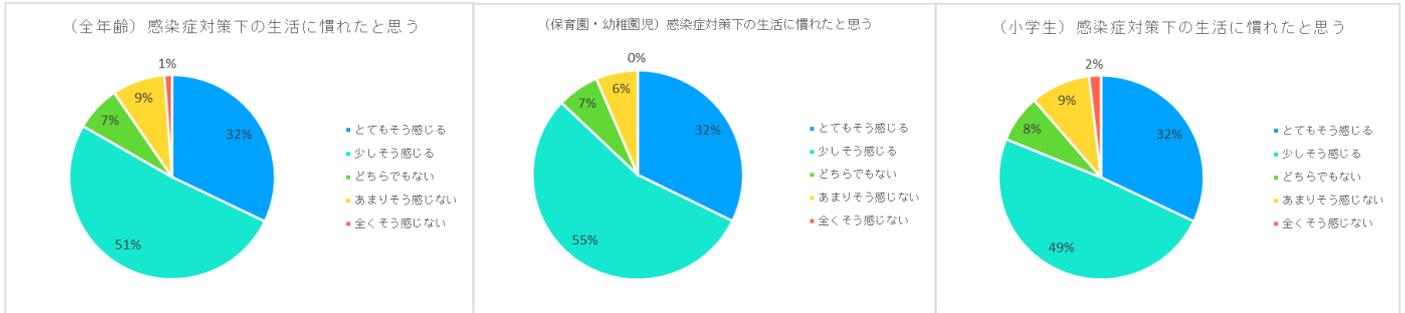
| | 第1期:2020年8月 | | 第2期:2021年8月 | | 第3期:2022年8月 | |
|----------------|-------------|-----|-------------|-----|-------------|-----|
| | 全年齢 | | 全年齢 | | 全年齢 | |
| | 未就学児 | 小学生 | 未就学児 | 小学生 | 未就学児 | 小学生 |
| 体調不良の増加 | 38 | 37 | 21 | 28 | 29 | 36 |
| 睡眠の問題の増加 | 24 | 30 | 21 | 23 | 19 | 25 |
| 食欲の変化 | 17 | 23 | 25 | 27 | 22 | 25 |
| 通勤の問題の増加 | 4 | 5 | 12 | 11 | 17 | 19 |
| 怒りっぽくなった | 31 | 36 | 42 | 39 | 48 | 44 |
| 疲れやすくなった | 41 | 48 | 46 | 53 | 61 | 59 |
| 業務・家事遂行上の問題の増加 | 36 | 33 | 33 | 33 | 39 | 38 |
| 家族トラブルの増加 | 14 | 15 | 42 | 24 | 29 | 28 |
| 友達トラブルの増加 | — | — | 21 | 8 | 6 | 6 |
| | | | | 2 | | |

※表中の数値はそれぞれの調査時期の回答者における割合(%)を示す。

C-1. 感染症対策下での保護者の生活感覚

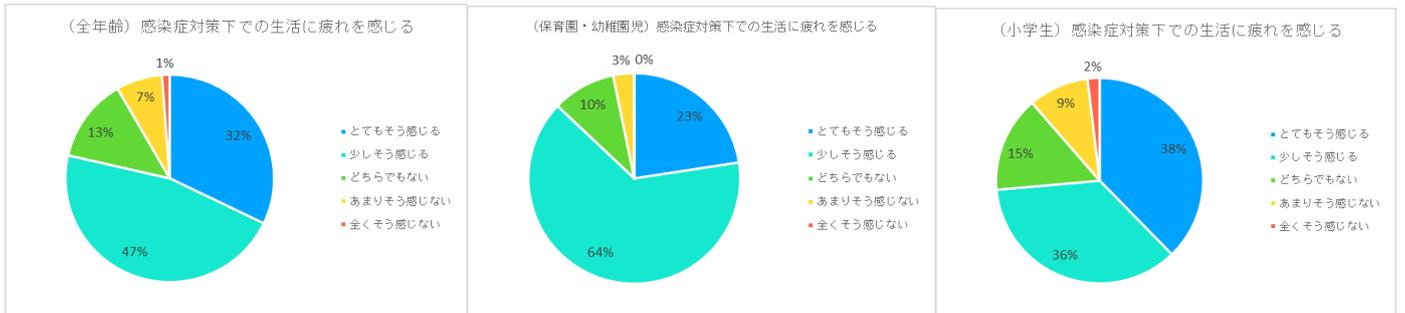
(感染症対策下の生活に慣れたと思うか?)

全年齢の保護者では 83%、未就学児の保護者では 87%、小学生の保護者では 81%と、年齢群によらず 8 割以上の保護者が感染症対策下の生活に慣れていると感じている。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



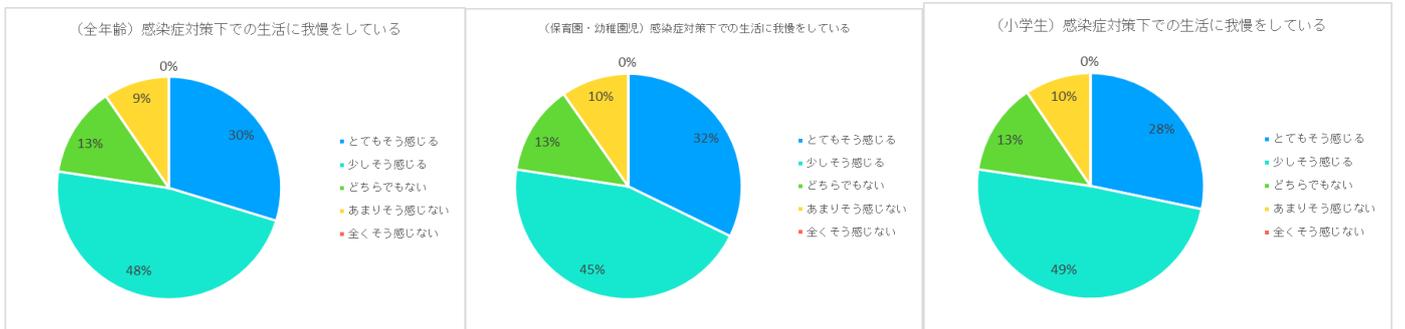
(感染症対策下の生活に疲れていると思うか?)

全年齢の保護者では 79%、未就学児の保護者では 87%、小学生の保護者では 74%と 7 割~8 割の保護者が感染症対策下の生活に疲れを感じている。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



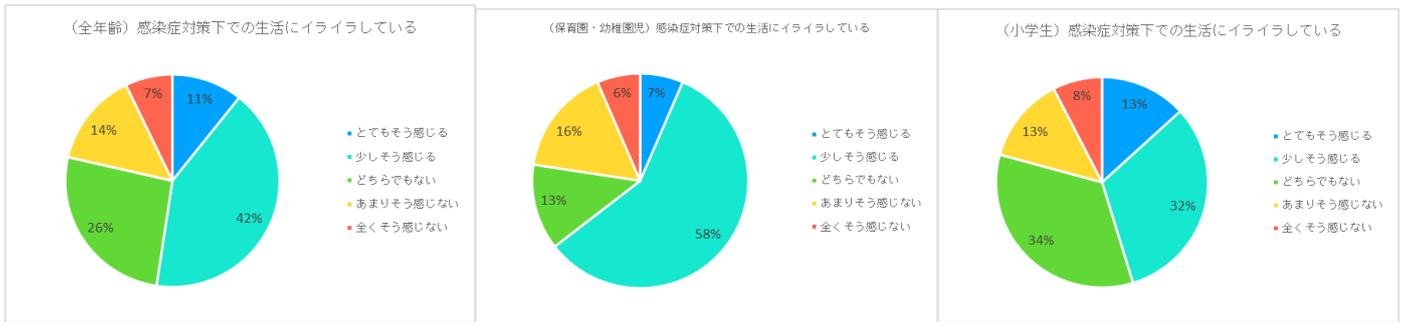
(感染症対策下の生活に我慢をしていると思うか?)

全年齢の保護者では 78%、未就学児の保護者では 77%、小学生の保護者では 77%と年齢群によらず 8 割弱の保護者が感染症対策下の生活に我慢をしていると感じている。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



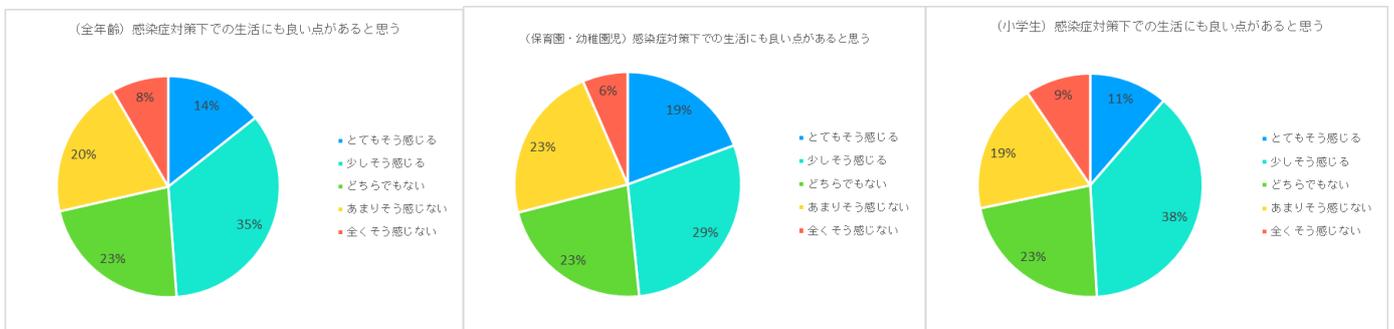
(感染症対策下の生活にイライラしていると思うか?)

全年齢の保護者では 53%、未就学児の保護者 65%、小学生の保護者では 45%が感染症対策下の生活にイライラしていると感じている。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



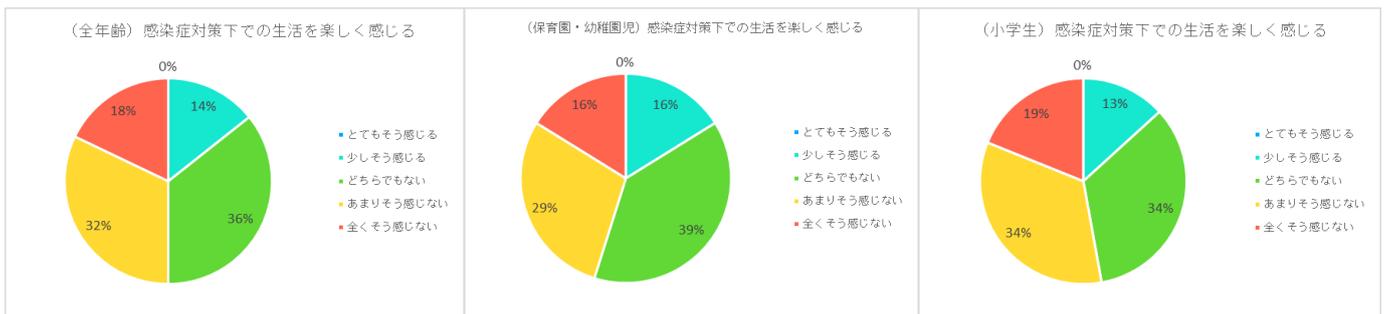
(感染症対策下の生活にも良いところがあると思うか?)

全年齢の保護者では 49%、未就学児の保護者では 48%、小学生の保護者では 49%と年齢群によらず約半数程度の保護者が感染症対策下の生活にも良いところがあると感じている。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



(感染症対策下の生活を楽しくしているか?)

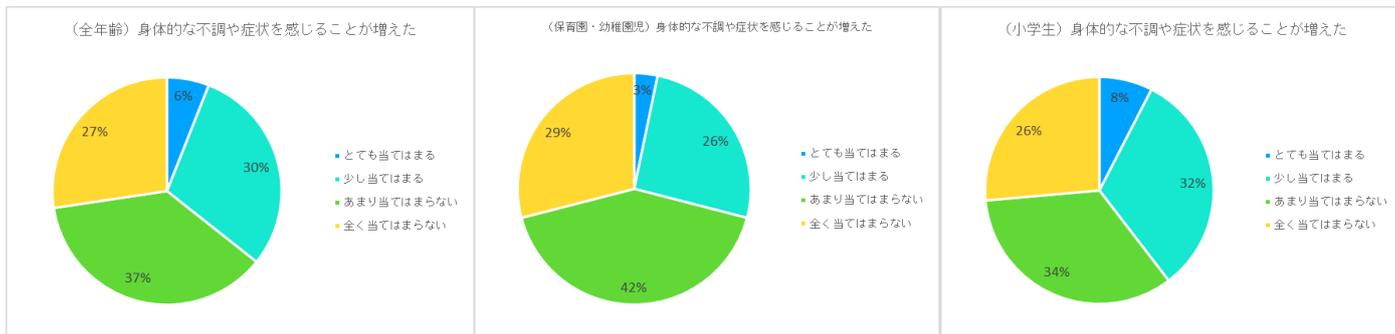
全年齢の保護者では 14%、未就学児の保護者では 16%、小学生の保護者では 13%が感染症対策下の生活を楽しくしていると感じている。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



C-2. 保護者の心身の変化

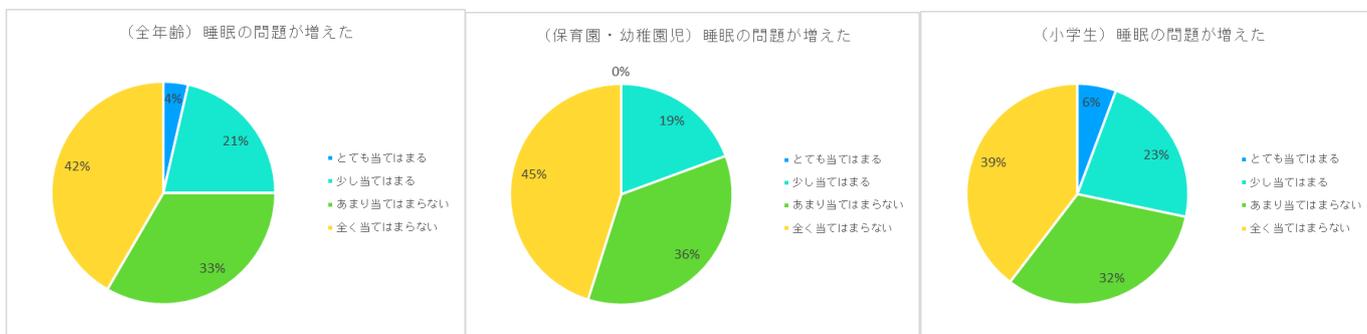
(身体的な不調が増えたか)

全年齢の保護者では 36%、未就学児の保護者では 29%、小学生の保護者では 40%が体調不調が増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



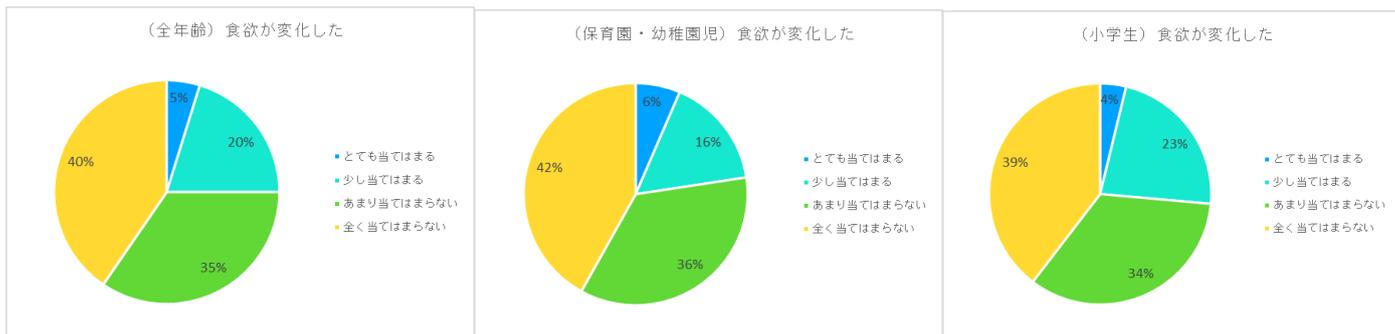
(睡眠の問題が増えたか)

全年齢の保護者では 25%、未就学児の保護者では 19%、小学生の保護者では 29%が睡眠の問題が増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



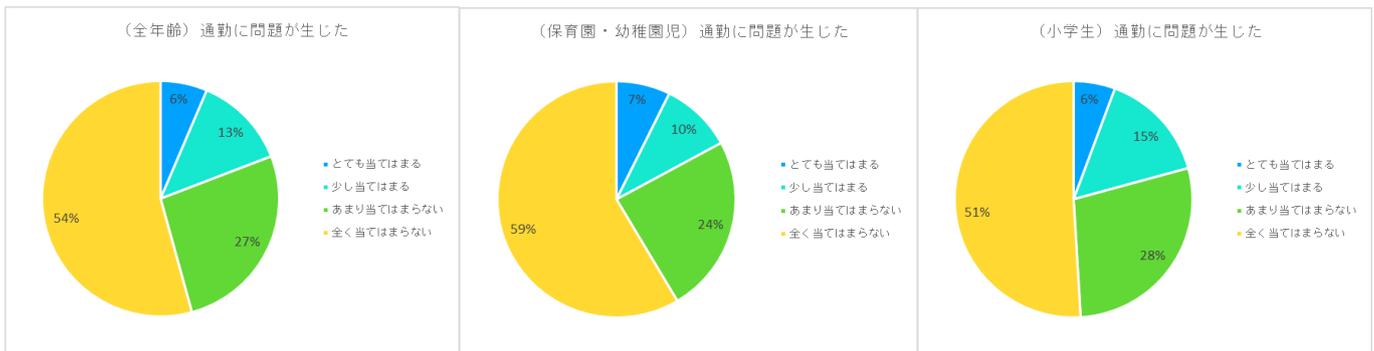
(食欲が変化したか)

全年齢の保護者では 25%、未就学児の保護者では 22%、小学生の保護者では 27%が食欲の変化があったと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



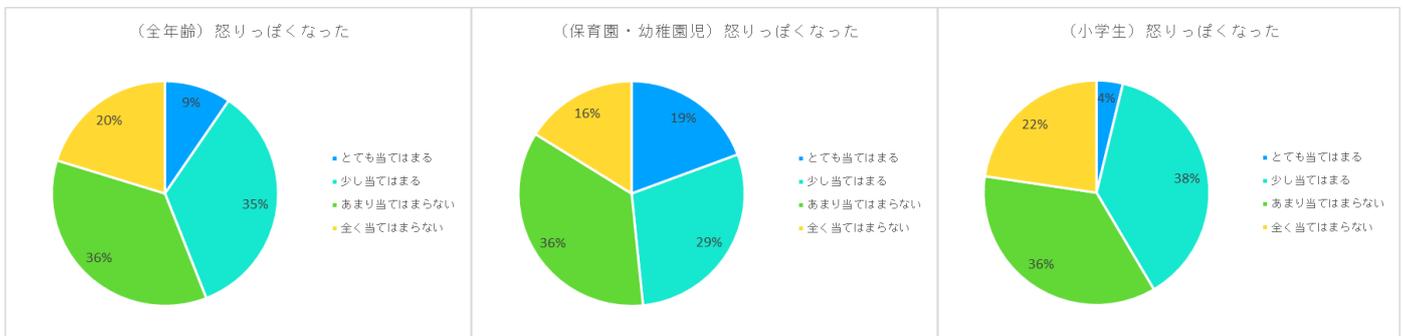
(通勤の問題が生じたか)

全年齢の保護者では 19%、未就学児の保護者では 17%、小学生の保護者では 21%が通勤の問題が増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



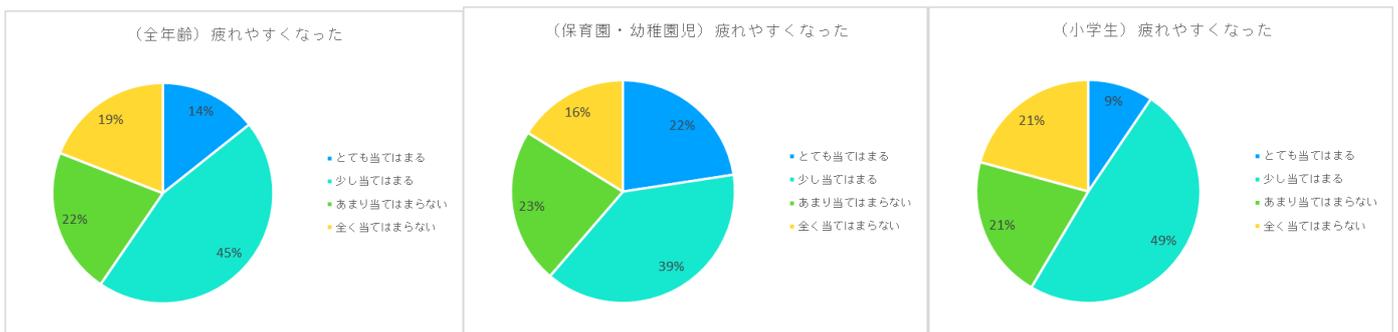
(怒りっぽくなったか)

全年齢の保護者では 44%、未就学児の保護者では 48%、小学生の保護者では 42%が怒りっぽくなったと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



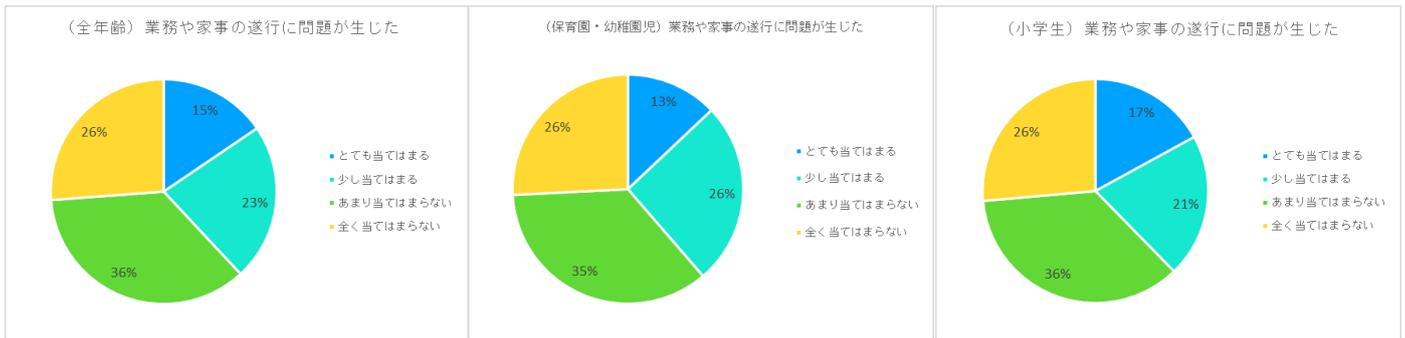
(疲れやすくなったか)

全年齢の保護者では 59%、未就学児の保護者では 61%、小学生の保護者では 58%が疲れやすくなったと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



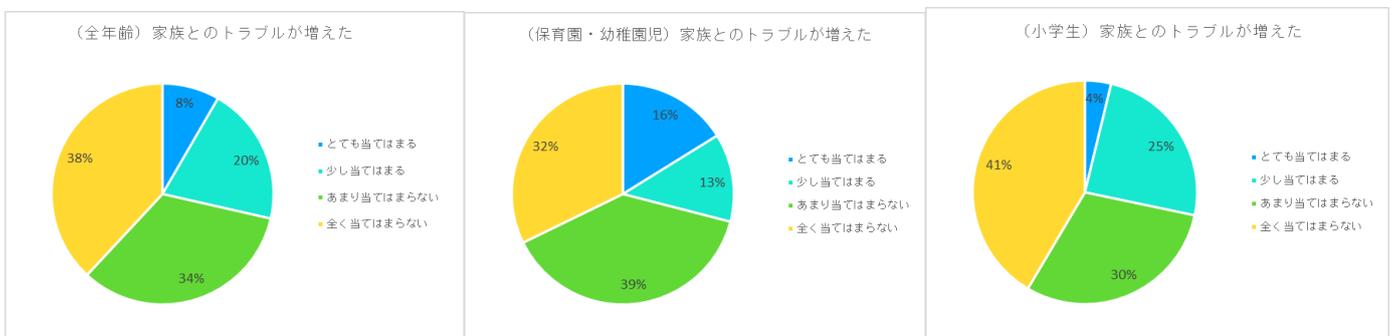
(業務や家事の遂行に問題が生じたか)

全年齢の保護者では 38%、未就学児の保護者では 39%、小学生の保護者では 38%が業務や家事を遂行する上での問題が増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



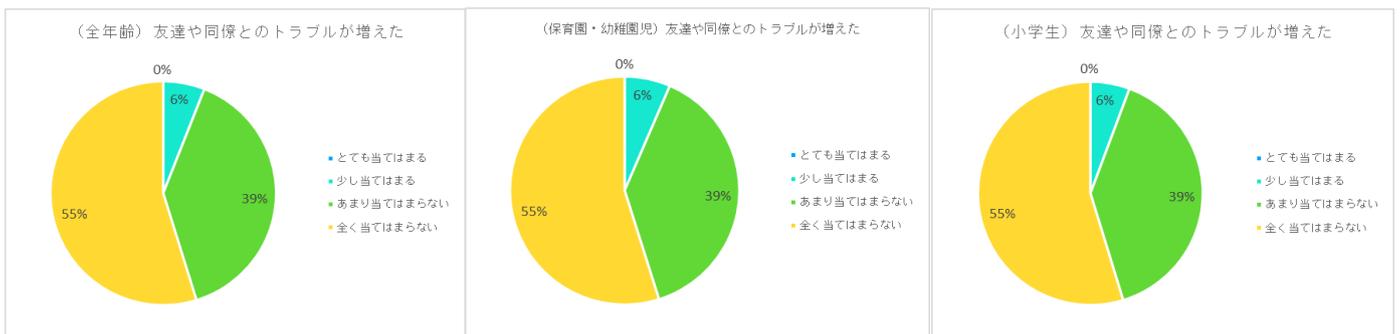
(家族とのトラブルが増えたか)

全年齢の保護者では 28%、未就学児の保護者では 29%、小学生の保護者では 29%が家族とのトラブルが増えたと回答。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



(友達や同僚とのトラブルが増えたか)

全年齢の保護者では 6%が友達や同僚とのトラブルが増えたと回答。未就学児の保護者でも小学生の保護者でも友達や同僚とのトラブルが増えたと回答した人は 6%であった。未就学児の保護者と小学生の保護者との間に統計的な差はなかった。



C-3. 保護者自身の変化として気づくこと（自由記述）

（行動制限・自粛生活の影響）

- ・旅行が好きだが、感染拡大を見るとなかなか旅行やイベントの参加ができない事が少し辛い
- ・これまで出来ていたこと（家族・友人・職場）が制限され、コミュニケーションの機会が減少して、楽しさや生きがいを感じる機会を制限されていると感じている
- ・友達と会う回数が減った、友人と会わなくなった（2）
- ・家族での外食は二年ほど出来ていない
- ・人と会話する機会は減った
- ・対人関係の希薄
- ・同じ障がいの子をもった保護者と知り合いになる機会がない。色々相談したり話したりできたら、悩みも少しは解消するかもと思う

（心身の変化）

- ・マスクで、肌が荒れやすくなった
- ・活動量が下がり、食欲が増え、体重が増えた
- ・寝付きが悪い。疲れやすくなり、将来に対する不安から不眠あり
- ・睡眠、休養の時間サイクルが変わり、眠れないこともしばしばあり、それでいらだつこともしばしばある
- ・漠然とした不安で辛い気持ちになる時間が増えた
- ・夫が家族以外と行く外食や飲み会が不安でたまらず、必要以上にイライラすることがあった
- ・消極的になった
- ・ストレスがたまる（2）
- ・一人で悩むことが多い

（生活習慣の変化）

- ・衛生面をすごく気を付けるようになった
- ・マスクが普通になった
- ・家の周りで過ごすことが増えた
- ・逆に感染しそうで病院にいけなくなった

（感染予防に対するストレス）

- ・気を使うことが増えていて、とてもストレスを感じる。窮屈だなといつも思っている
- ・感染しないようにとちょっとした買い物にも感染対策などに気を使い、ストレスが溜まる
- ・真実が何なのか、本当の情報を見極める事に疲れてきた

（感染症対策下の生活での子どもとの関わり）

- ・こどもがかわいそうという気持ちが強くなった。周りからもこどもがかわいそう、と言われる
- ・家族といる時間は増え家族とのコミュニケーションはふえた気がする

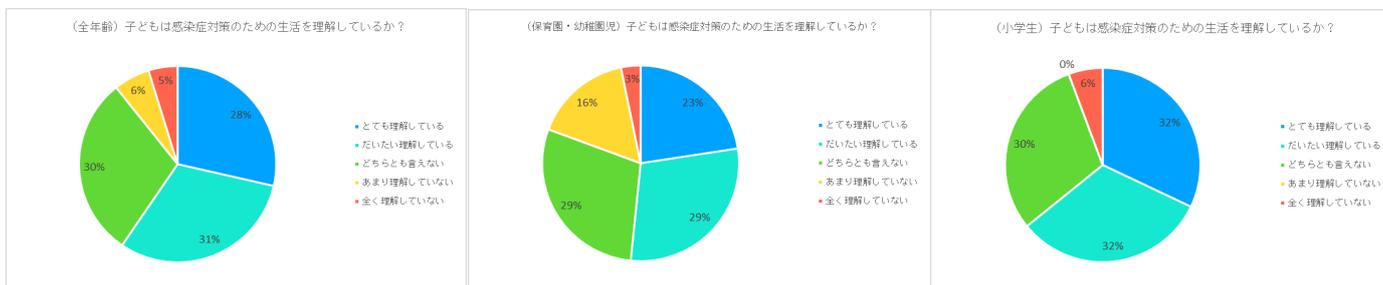
（仕事上の問題）

- ・子供の体調が少しでも悪いと、仕事を休まざるを得ないので職場に申し訳なさがある

D. 新しい生活様式の中で

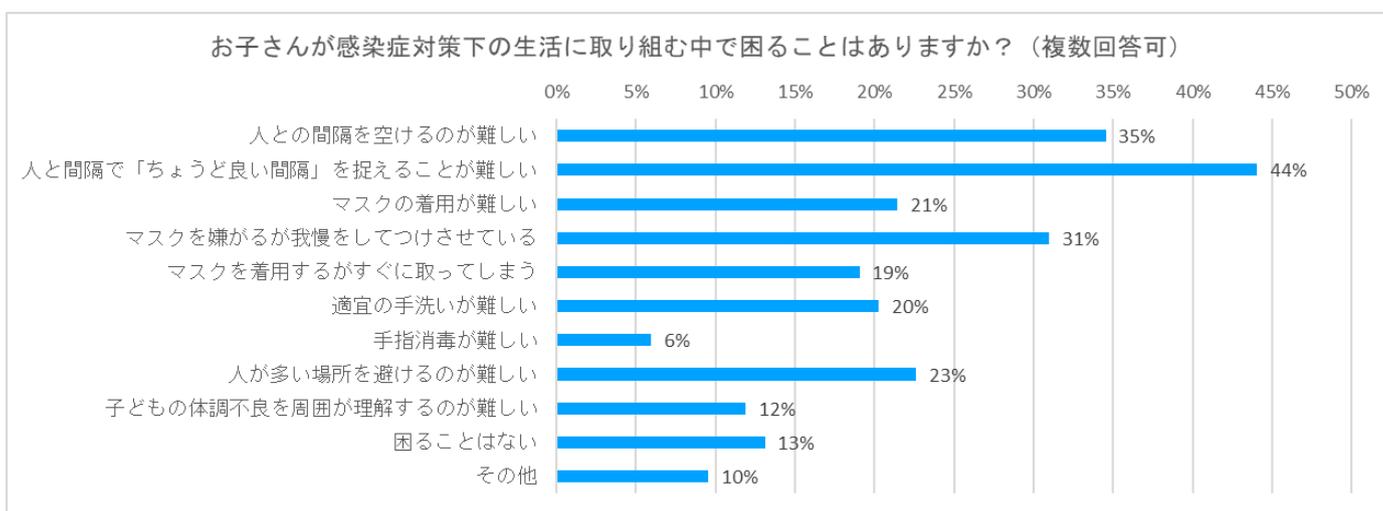
D-1. 子どもは感染症対策のための生活を理解しているか？

全年齢の59%の子どもが「とてもよく理解している」「だいたい理解している」と回答した。未就学児では52%、小学生では64%が感染症対策のための生活を理解していると回答した。未就学児と小学生との間に統計的な差があり、未就学児の方が小学生より「あまり理解していない」と回答した人が多かった。



D-2-1. 子どもが感染症対策下での生活で困ること

全年齢における困ることの内容は、複数回答で44%が「人と間隔で‘ちょうど良い間隔’を捉えることが難しい」と回答した。それに続き「人との間隔を空けるのが難しい：35%」「マスクを嫌がるが我慢をしてつけさせている：31%」など、人との間隔を空けたりマスク着用に関する難しさを感じている回答が多かった。



※グラフ内数字は回答者全体に対する%を示す。

D-2-2. 子どもが新しい生活様式に取り組む中で困ること（自由記述）

（感染対策に関する困りごと）

- ・人の表情を読むことが元々難しいので、マスクで更に難しくなっている（2）
- ・マスクを嫌がる（2）
- ・マスクをくわえてしまう
- ・マスク強要
- ・マスク着用ができないので周囲の目を夫が気にしすぎる
- ・興味関心でどこそこ触る。なにかさわった手で何かを食べようとすることがある
- ・黙食
- ・手指の消毒で、冬場は荒れる
- ・手洗いも1人でできないので徹底するとなると負担も増える
- ・学校などの集団生活では徹底するのは難しいと思う

(登園・登校に関する困りごと)

・軽微な風邪症状や鼻炎などで、登園ができなくなり、集団生活に支障がある

(行事や活動の中止、行動制限に伴う困りごと)

・園の行事がへり、保護者が参加することもできなくなり、園での様子がわかりにくい

・したいことを我慢させることがある(キッズルーム等使用不可や、コロナが原因で色々な遊び場が休館していることがあった)

・少年団活動制限

・学校行事制限

・家にいるとゲームやYouTubeばかり見せてしまう

・経験不足

・自由な日常生活に制限がかかり、二度と来ない大切な少年の生活を犠牲にしている。早くコロナ前の日常を回復できるようにしてほしい

(人との距離感に関する困りごと)

・人混みにいきたがる、人との距離感が近すぎるので不安

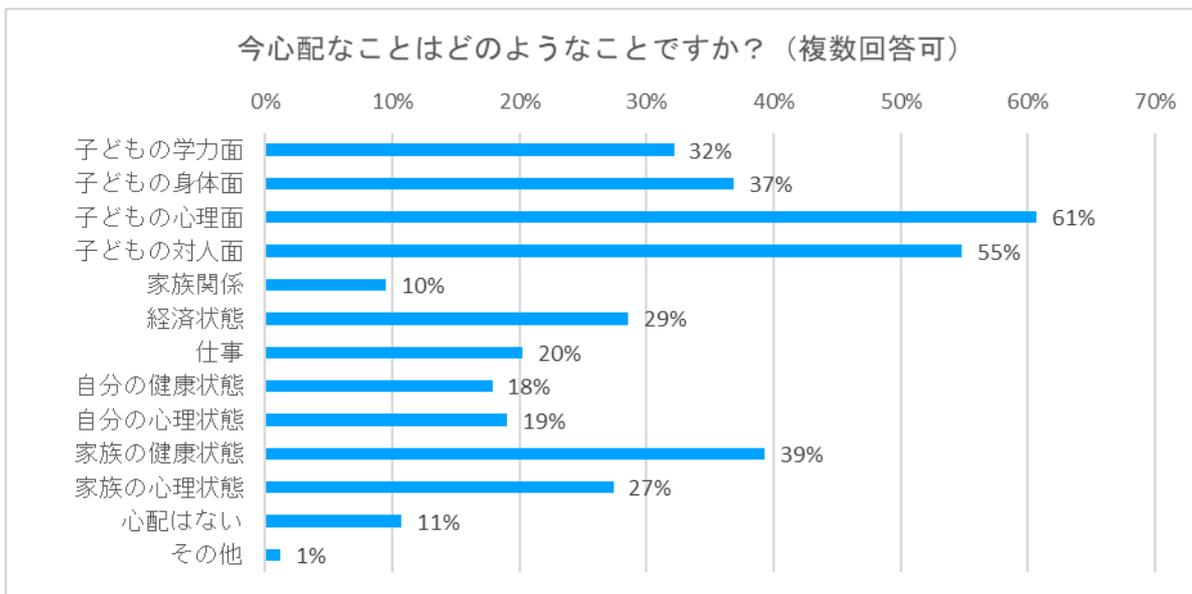
・外出を嫌がる、出掛けるのに躊躇する

(障害や特性による困りごと)

・知的障害があり、本人は何もわからないまま我慢することが以前より増えて、親や兄弟が気を使うことが更に増えており、早く気にせず生活できるようになってほしいと思う

D-3-1. 心配なこと

今心配なこととして、61%が「子どもの心理面」、55%が「子どもの対人面」をあげた。次いで「家族の健康状態：39%」「子どもの身体面：37%」が困りごととして挙げられた。また、「子どもの学力面：32%」「経済状態：29%」「家族の心理状態：27%」なども3割ほどの人が心配なことと感じている。子どものことに対する心配が多いが、家族のことや経済状態に関する心配事も感じていることが示されている。



※グラフ内数字は回答者全体に対する%を示す。

D-3-2. 心配なこと・困ること（自由記述）

（感染時、自宅待機時の心配）

- ・自宅待機や濃厚接触対象者になった時の仕事の勤務や子どもが幼稚園や学校へ行けない時の時間をどう考えるのか
- ・家族内感染でバラバラに過ごさなければならなくなった時のケアが心配
- ・コロナで体調を崩すのももちろん心配だが、家族の人生の大事な場面で感染したり濃厚接触者になってしまい、大切な機会を失ってしまうことも心配
- ・仕事で発熱者の対応を行いながら、いつ感染してもおかしくないという恐怖がある

（感染症対策が子どもに与える影響について）

- ・中止された学校行事やクラブ活動などの補てん。子どもたちの世代ごとに欠けた経験があることの不安
- ・人との交流制限が将来子どもの成長・発達に（コミュニケーション・体験・経験）どう影響するか心配
- ・こどもの成長のためにはたくさんの人との関わりを持ちたいが、それが難しい
- ・マスクを長時間つけていると蒸れたり、口を閉じにくくなったり、弊害があると思う
- ・マスク生活が長いため、子どもの脳の成長に影響がないか
- ・感染を心配しながらも療育に行っているが、療養を優先した方がいいのか、感染対策を優先して療育を休ませた方がいいか迷うことが多々ある
- ・子どもが消極的になるのでは

（生活面・経済面）

- ・離れて暮らす家族の状況
- ・子どもの日常生活。少しでも体調が悪いと外に出歩けない為、家の中で走り回りうるさい
- ・基礎疾患のある祖父母には頼れない事、感染した場合の子どもの世話などを考えると、離職も視野にいれている。離職すると経済的な不安はあるが、家族や職場に迷惑をかけてまで働くべきなのか、悩んでいる
- ・休みが増え、仕事を始めたいが、躊躇してしまう
- ・仕事も子供の微熱で園から呼ばれるため、職場に迷惑をかける事が多く、申し訳ない
- ・コロナで解雇され、収入が少なく生活が苦しい
- ・感染し、仕事を休み、有休がなくなり足りない分は欠勤扱いになり給料カットされた。
- ・コロナによって夫の仕事が不調

（行事・イベント）

- ・外出や体験などができない
- ・今後もイベントなど開催延期や休止が続くのか
- ・県外に旅行に行けない

（感染症対策について）

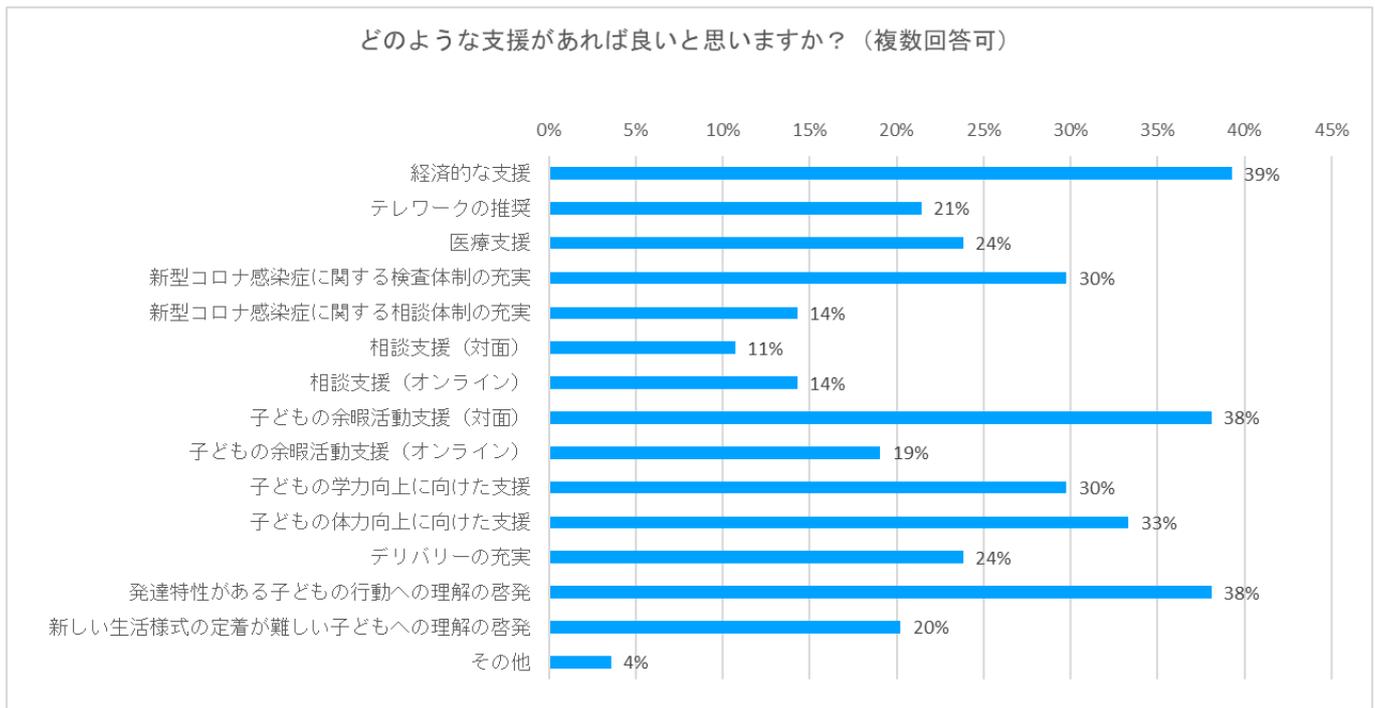
- ・コロナ対策に効果を感じない
- ・コロナだけでなく子どもは急な病気が多いのに、受診する場所が更に狭まった。何度も痛い検査をさせてしまい、もっと簡単な検査がないかと思う
- ・毎日感染者数を聞いて気分が落ち込む

（発達特性がある子どもについて）

- ・社会性が乏しく、言葉の遅れがあり、幼稚園、療育に行っているが、マスクで表情や口の動きが見えないため、発達にも影響があると感じる。マスクがなかったら、まだ伸びていたのでは？とってしまう

D-4-1. 望む支援

保護者が望む支援としては、「経済的な支援：39%」「子どもの余暇活動支援（対面）：38%」「発達特性がある子どもの行動への理解の啓発：38%」が多く挙げられた。



※グラフ内数字は回答者全体に対する%を示す。

D-4-2. 望む支援（自由記述）

（経済的支援・物質的支援）

- ・遠方の病院へ行く旅費の助成
- ・家にいることが増え、光熱費や食費が増え物価の高騰もあるので生活費の支援がもっとあればありがたい
- ・金銭援助。コロナにまつわる経済困窮の支援がもらえない。物価はあがるのに収入は増えない。金銭にゆとりがあれば少しは安心する

・日用品の補充

・食事の確保

（遊び場所の提供）

・マスクなしでも思いきり泥遊びなど自然の中でできる感覚遊びができる雰囲気のある場所がほしい。マスクをしなくてもいいところで支援を受けたい

・子供が思いっきり体を動かせる場が欲しい（3）

・室内遊び場。

・運動施設の無料使用支援。映画、劇など無料観賞支援。

（障害や特性のある子どもへの理解の促進）

・情報の確保 周囲の理解

・障害がある人たちに対してとにかく一般の人たちの理解を上げてほしい

・マスクがつけられない子への支援、理解。障がいをもつ子のおやの会

（教育的支援）

・ICT の活用

- ・オンラインでの学習支援
(その他)
- ・心理的な支援の充実
- ・こどもの急病に対応できる場所
- ・マスク強要しないほしい
- ・人的交流、接触が制限されるなかでは、適切な支援を得ることは困難

D-5. 感染症対策下の生活で工夫していること・気をつけていること（自由記述）

(感染症対策について)

- ・手洗い、うがい
- ・マスクの着用
- ・換気
- ・人混みを避ける
- ・消毒
- ・体調をよく把握する
- ・帰宅後はすぐ入浴する
- ・食器やタオルをわける
- ・食事の盛り方(個人に分ける、鍋等は取り箸を必ず使うなど)
- ・買い物などは個配を利用し、不特定多数の集まるような場所に行かないようにしている
- ・必要以上の買い物へは出掛けない。人の少ない時間帯に行く
- ・外食を避ける
- ・住んでいる自治体で感染者が増加傾向の場合は習い事を休む
- ・基礎疾患のある祖父母宅へは極力立ち寄らない
- ・感覚過敏があり、不織布マスクが苦手なため、布マスクを何とか頑張ってつけている
- ・県外移動の自粛

(工夫して外出)

- ・外食するときは個室を利用したり、内湯付きの旅館に宿泊したり、感染対策をしながら、できるだけコロナ前と同じように過ごせるようにしている
- ・出かける時は朝早くや夕方など人混みの少ない時間、場所をえらぶ
- ・人が密集しない場所、曜日（平日）に遊びに行く
- ・イベントや旅もふくめ、コロナ禍でも、子どもたちの成長につながる体験は可能な限り与える

(おうち時間の工夫)

- ・自宅で遊べる道具や自宅で楽しめる遊び（工作、料理、お菓子作り、実験セットなど）をする

(生活習慣の工夫)

- ・食事、睡眠、生活リズム
- ・夏休みもエアコンをつけて家で過ごすことがほとんどで、子どもも家を出る機会が少なくなっているため、規則正しい生活を続ける、栄養のバランスの取れた食事、軽い散歩をするなど、出来るだけ健康的な生活を心がけている

(子どもへの対応の工夫)

・対策を伝える時に不安にさせないようにテレビ等の情報をそのまま見せるのではなく、ポジティブな言葉に変換して伝え、不安にならず楽しんで出来る様に気をつけている

・感染症対策の必要性は考慮しつつ、義務感や負担感を背負わせすぎないこと

(マスクを外す)

・可能な限りマスクをさせない

・家や屋外ではできる限りマスクを外すようにしている

(その他)

・この生活が長くなり、もはや何が負担で、どこを工夫しているのか分からなくなっている

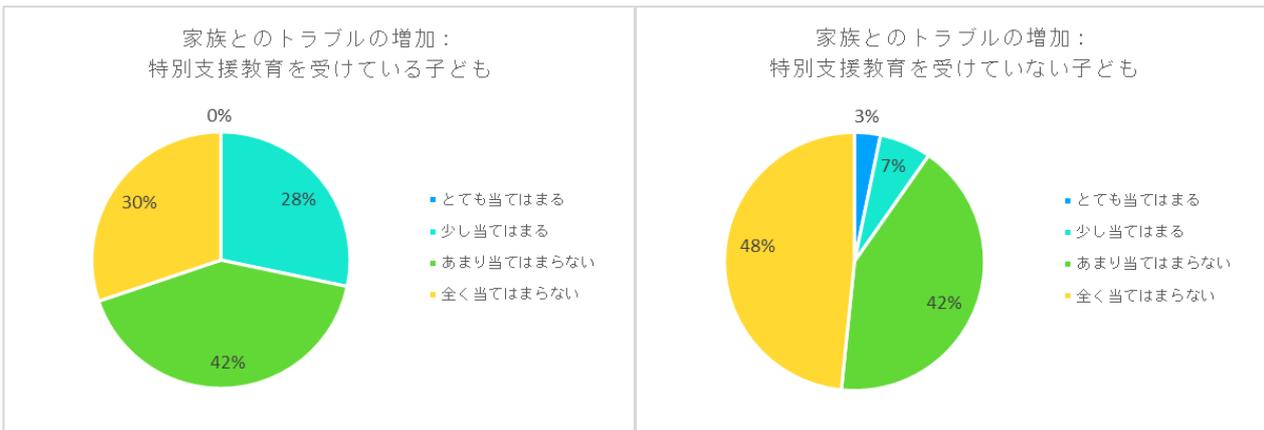
E. 特別支援教育等を受ける子どもたち・保護者について

‘友人・家族トラブルの増加’対策下の生活で負担募る’

特別支援教育や教育福祉サービスを受ける子どもたち及び保護者と、それらサービスを受けていない子ども及び保護者と比較したところ、特別支援教育等を受ける子どもとそうでない子どもとの間で「家族とのトラブルの増加」と「友達とのトラブルの増加」において統計的な差があった。また、感染症対策下での生活に取り組む中で困ることについては、「人との間隔で‘ちょうど良い間隔’を捉えるのが難しい」「マスクの着用が難しい」において統計的に差がある傾向があった。今困ることについて「心配はない」において統計的な差があった。望む支援については「新型コロナウイルス感染症に関する相談体制の充実」において統計的に差がある傾向、「相談支援(対面)」「発達特性がある子どもの行動への理解の啓発」「新しい生活様式の定着が難しい子どもへの理解の啓発」において統計的な差があった。下記に差が示された項目について整理する。

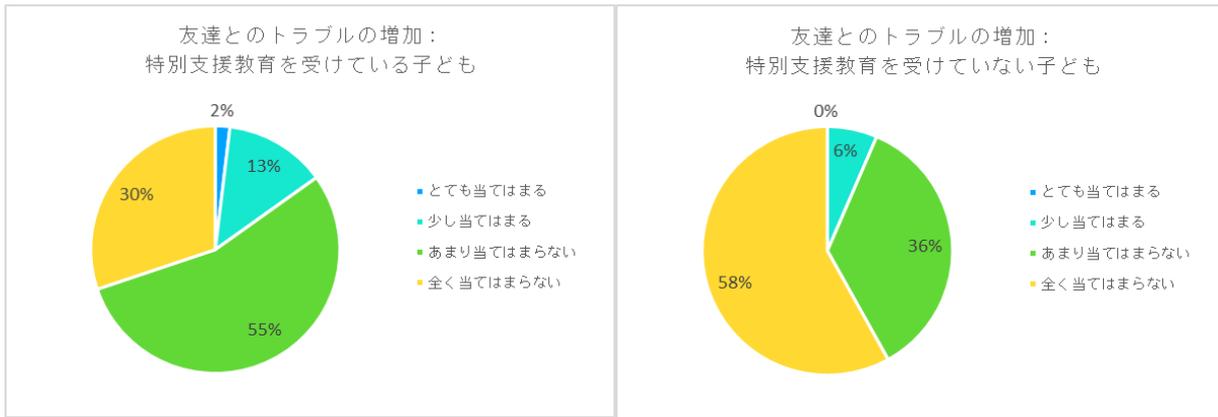
(家族とのトラブルの増加)

特別支援教育等を受けていない子どもについては10%が「家族トラブルが増えたと思う」と回答したことに比べ、特別支援教育等を受ける子どもについては28%とより多い割合で家族トラブルの増加を感じていることが示された。



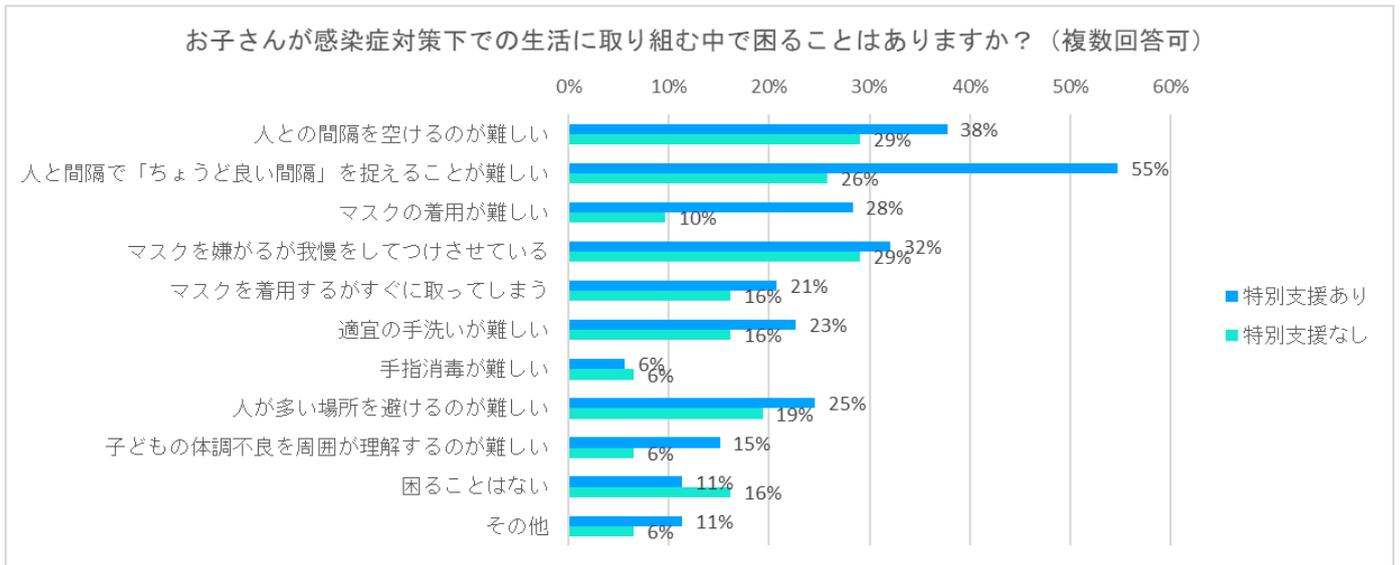
(友達とのトラブルの増加)

特別支援教育を受けていない子どもについては、94%が「友達とのトラブルが増えたと思わない」と回答したことに比べ、特別支援教育を受けている子どもについては85%とより少ない割合であった。



(感染症対策下での生活に取り組む中で困ること)

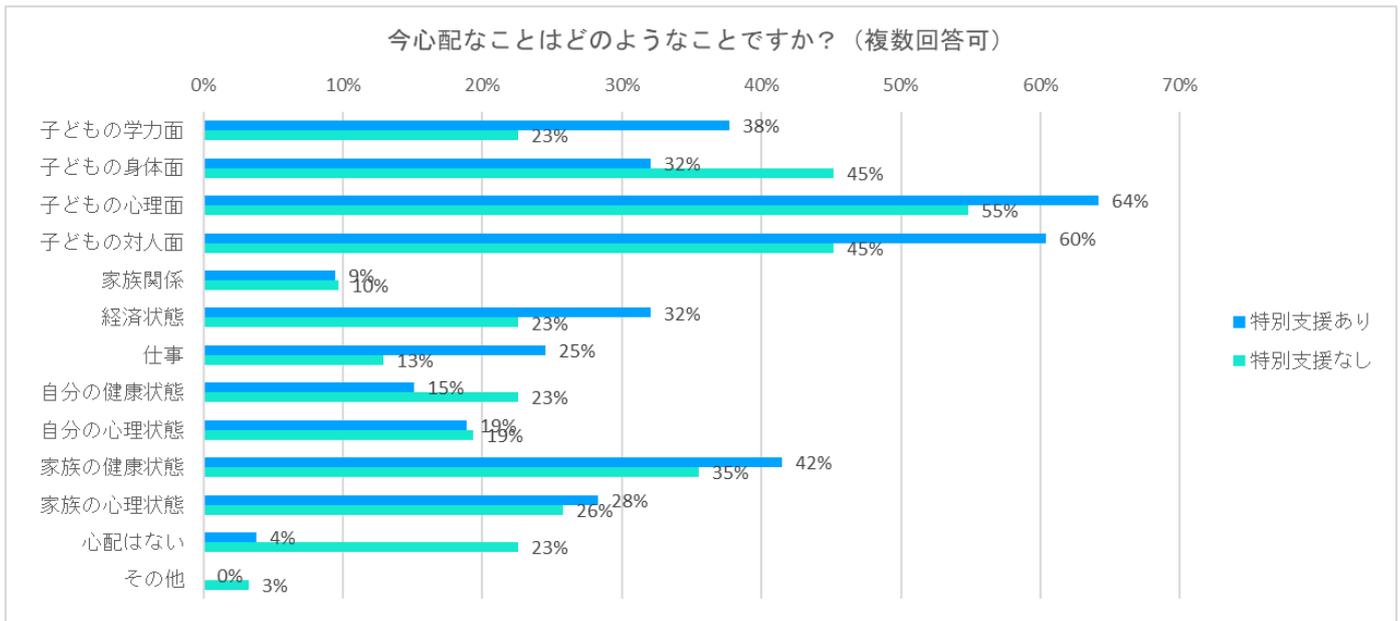
特別支援教育を受けている子どもでは55%が「人との間隔で「ちょうど良い間隔」を捉えることが難しい」と回答したことに比べ、特別支援を受けていない子どもでは26%と少ない割合であった。



※グラフ内数字は回答者全体に対する%を示す。

(今心配なこと)

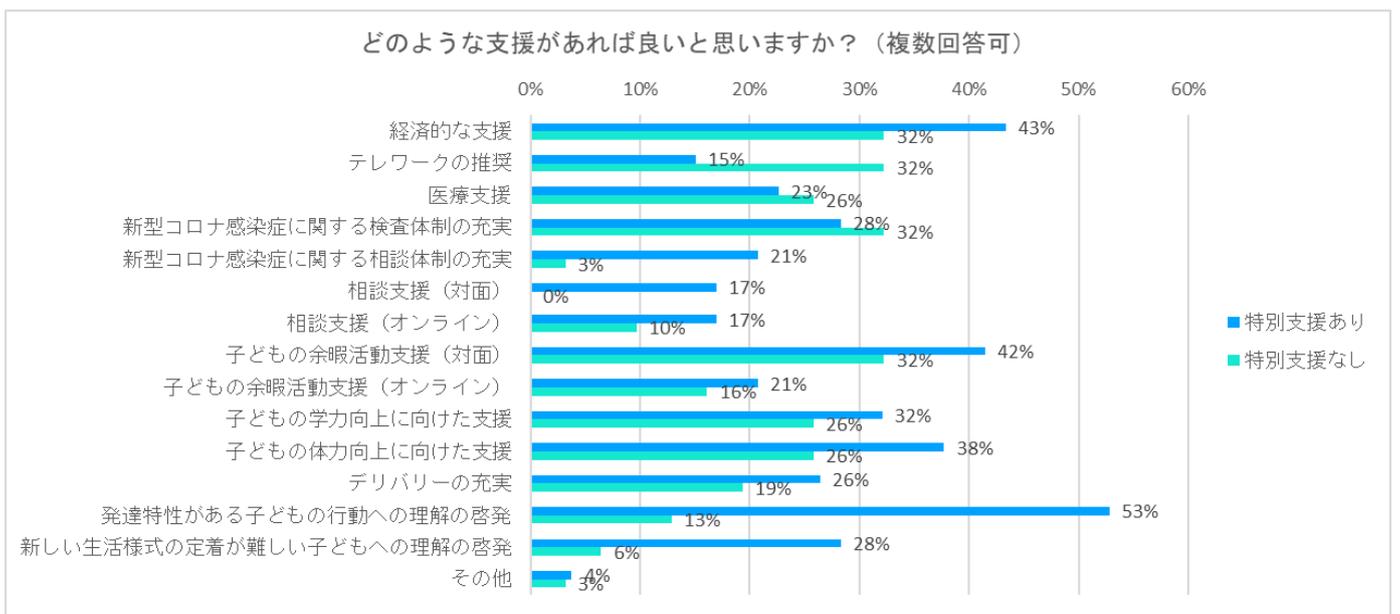
特別支援を受けている子どもでは4%が「心配はない」と回答したことに比べ、特別支援を受けていない子どもでは23%と多い割合であった。



※グラフ内数字は回答者全体に対する%を示す。

(どのような支援があれば良いか)

特別支援を受けている子どもでは21%が「新型コロナウイルス感染症に対する相談体制の充実」を選択しているが、特別支援を受けていない子どもでは3%と少ない割合であった。また、「相談体制 (対面)」では特別支援を受けている子どもでは17%いるのに対し、特別支援を受けていない子どもでは0%であった。「発達特性がある子どもの行動への理解の啓発」では特別支援教育を受けている子どもが53%、そうでない子どもでは13%と少なく、「新しい生活様式の定着が難しい子どもへの理解の啓発」では特別支援を受けていない子どもが28%、そうでない子どもでは6%と少なかった。



※グラフ内数字は回答者全体に対する%を示す。

4. 調査結果のまとめ

1) 感染症対策下の生活の子どもへの影響

‘慣れたが疲れやイライラが継続“マスクが外せない子どもも’

コロナ禍3年目となり、子どもも保護者も 8割ほどの人が感染症対策下の生活に慣れてきていると感じていることがわかった。マスク着用などの感染症対策にも慣れている一方で、マスクを外せなくなったという子どもの変化も挙げられていた。感染症や感染症対策下の生活に慣れている子どもが多いものの、7割ほどの子どもは感染症対策下の生活に我慢をしており、疲れを感じていたり、イライラしていたりする子どもも4割～5割弱ほどいることが示された。子どもの変化としては、甘えることが増えたり、通学の問題の増加、身体的不調の増加、勉強の問題の増加、家族とのトラブルの増加など、心理面や身体面、行動面、対人面の問題の増加が感じられていることが明らかとなった。感染対策下での生活が長期化することで、行事や活動の中止、感染症対策下の生活における行動制限に対するストレスを感じている一方で、行きたいところに行けなかったり、したいことができなかつたりすることにも慣れてしまったという諦めとも取れる声も聞かれた。

2) 感染症対策下の生活の保護者への影響

‘慣れたが心身の負担が継続 疲れやすく怒りっぽく’

保護者自身としても 8割以上の人が感染症対策下の生活に慣れていると感じているものの、8割弱の人が疲れや我慢を感じており、疲れやすくなったり、怒りっぽくなったりするなどの心理面の変化、業務・家事遂行上の問題の増加、体調不良の増加など、行動面や身体的な変化があったことが示された。また、新型コロナウイルスに関する情報は毎日感染者数の報告がなされ、専門家によっても意見が異なったり、変異株の出現などにより日々情報が変化し、そうした様々な情報をどう捉え、どう生活していくかということが明確ではなく、感染症に関する情報を見極めることに対する疲れもあるようであった。

3) 新しい生活様式上の困難 ‘子どもの心理面・対人面に不安’ ‘家庭の経済面の不安も’

未就学児では5割程度、小学生では6割弱の子どもたちが感染症対策のための生活について理解していることが示された。感染症対策下の生活で困ることとしては、人との間隔を空けることやマスク着用に関する難しさを感じる人が多かった。心配なこととしては、5割～6割の人が子どもの心理面や対人面を挙げていた。子どものことに関する心配が多いものの、経済状態や家族のことについても3割ほどの人が心配と挙げていた。調査が行われた2022年8月～9月は感染者が急増していた状況もあり、感染すること自体への不安だけでなく、濃厚接触者としての自宅待機、感染した状況下での隔離生活などへの不安もあった。そうした状況の中で、望む支援としては約4割の人が経済的支援を望んでおり、子どもや自身のちょっとした体調不良により自宅待機を余儀なくされ、コロナ禍で仕事や学校などの社会生活を送っていくことの難しさを感じているようであった。また、子どもの行事やイベントが中止となり、子どもの体験が不足することや、マスク着用やソーシャルディスタンスなどの対策が子どもの発達へ悪影響を与えるのではという不安も挙げられており、対面での子どもの余暇活動支援を望む人も4割弱いた。一方で、感染症や経済面、生活面での不安を抱えながらも、感染症対策を行いながらも子どもに様々な経験をさせられるように工夫をして外出したり、自宅で過ごす時間の工夫などもされていることが明らかとなった。

保護者自身としても、感染者の増加や濃厚接触者として自宅待機をしなければならない状況が続き、疲れやストレス、職場に迷惑をかけているという思いを抱えているようであった。感染症対策に対しても、基本的な感染対策に努める人が多い一方で、マスク着用の強制や感染対策に疑問を抱く人の意見も挙げられていた。

4) 2020年第1期調査、2021年第2期調査との比較

‘3年間の対策下の生活に慣れはしたが心身の負担は継続 疲労の蓄積から家族トラブルの増加’

2020年の第1期調査、2021年の第2期調査の結果と比較すると、感染症対策下の生活に慣れていると感じていると感じる人が2022年では約8割と多くなっているが、子どもや保護者の生活の負担や心身の負担や軽減していないことが多いことが明らかとなった。特に子どもが疲れやすくなったと感じる人が年々増加傾向にあり、外出制限や自宅待機など、長引く感染症対策が影響している可能性が考えられる。保護者としても通勤の問題や家族とのトラブルが増加傾向にあることが示され、感染者が急増したことにより濃厚接触者として自宅待機をしなければならないことが増えたことなどが要因として考えられる。

また、特別支援教育を受けている子どもたちにおいては、家族とのトラブルや友達とのトラブル等、対人面におけるトラブルが増加している可能性が考えられた。そうした対人トラブル等の増加を受けて、特別支援教育等を受けている子どもを持つ保護者は、相談体制の充実や発達特性がある子どもの行動への理解の啓発、新しい生活様式の定着が難しい子どもへの理解の啓発を望む人が多くいることがわかった。

5. おわりに

3年目の調査から、長期化する感染症対策下での子どもも保護者も負担が継続していることが示された。感染症の扱いが変わり、マスクや行動、行事の扱いや人との距離など、子どもの生活には再度変化が生じていく。今後の生活で子どもの心身の負担がどのように変化していくのか、負担が緩和していく過程も含め捉えていく必要があるだろう。

6. 調査の呼びかけにご協力いただいた機関

奄美地区障がい者等基幹相談支援センター / 霧島市すこやか保健センター

7. 調査実施者

鹿児島大学そだちサポートプロジェクト（本調査担当：高橋佳代・今村智佳子・平田祐太郎・川添茜）

なお、本調査はJSPS 科研費 20K02209 の助成を受けて行われたものです。